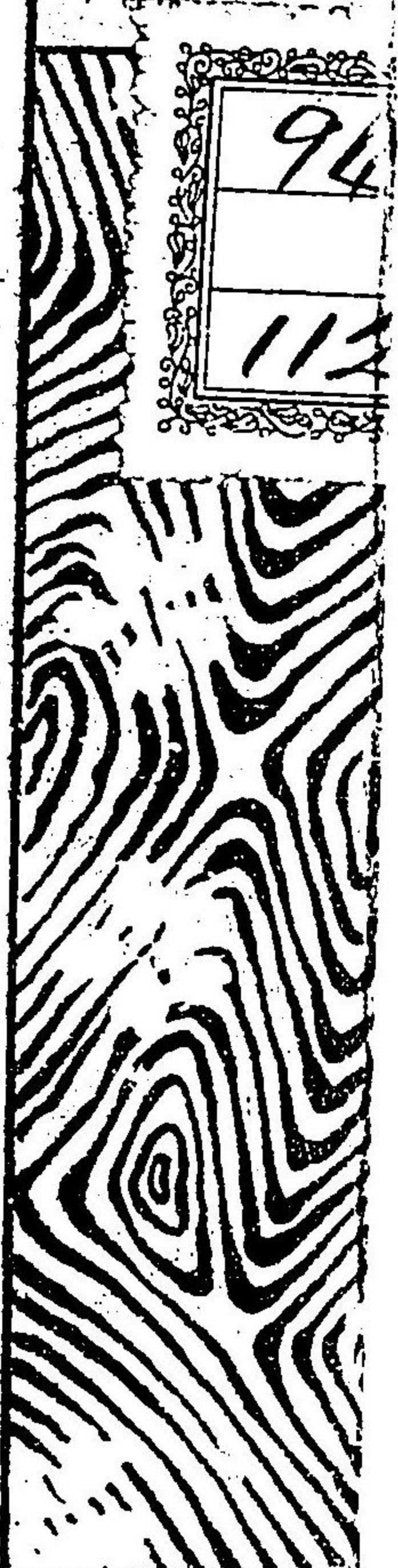


214R53
訂校部太作岡藤

著國隆源

選語物昔今

石叻本庫卷の五



京 東

行發信山富社會資合

源隆國著

藤岡作太郎校訂

今昔物語選全

名譽編輯

東京合資會社
富山房發兌



源隆國著

藤岡作太郎校訂

余昔物語選全

余昔物語

名譽文庫

東京合資會社 富山房發兌



今昔物語 古寫本

物之打卧御衣（京中）人舉切問
 方爭行未可有事當時有事想彼云事安許
 遠事老（世）人皆首頓手連信責早法無
 帝日問給也云地物甲保信給言台序社春
 何老給中朕區枕給問給也金對也
 台問給也然此不受中人有一事不之中
 不給候此不受中人怪也給傳也
 兄弟二人須言草草死詠弟早也
 今昔一國 郡住人有男子二人有且
 其二人子共息悲事年任忘事元一昔夫人表
 似也們子六祖意時打其彼慕行渡流
 我身有憂歎生祖向之樣去返而問漸手
 片積也子六也杜顧難堪事六有兄思樣按
 思可 換毛草草草其見人思忘也彼
 直草慕邊須見思須其後亦常行例中奉
 春給元問元序成不具成弟元系
 思我等二人相息思日相夜晚元既

今昔物語選目次

三獸菩薩の道を行ひて、兎身を焼く語ものかたり○

獅子猿の子を哀び、肉を割きて鷲に與ふる語ものかたり○

狐自ら獸王と稱し、獅子に乗りて死ぬる語ものかたり○

舍衛國の鼻缺猿帝釋を供養する語ものかたり○

龜鶴の教へを信ぜず、地に落ちて甲を破る語ものかたり○

龜猿の爲に誅らるる語ものかたり○

象足を株に踏み立て、人して抜かしむる語ものかたり○

七十餘りの人を他國に流し遣る語ものかたり○

鬚目の孟宗老母に孝して、冬の筍を得たる語ものかたり○

震旦の張敷死にし母の扇を見て、母を戀ひ悲む語○

震旦の韓の伯瑜母の杖を負うて泣く語○

朱の百年母を悲むが爲に、寒夜の衾を脱ぐ語○

震旦の厚谷父を謀りて不孝を止むる語○

長安の女夫に代りて、枕を違へて敵の爲に殺さるゝ語○

關寺の馱牛に化したる迦葉佛の語○

多武峰の増賀聖人の語○

源信内供横川に於て涅槃經を供養する語○

源信僧都の母の尼が往生の語○

下野公助父敦行に打たれて逃げざる語○

比叡山實因僧都が強力の語○

相撲人私市宗平鰐を投げ上ぐる語○

高陽親王人形を造りて、田の中に立つる語○

百濟川成、飛驒工が挑める語○

三善清行の宰相紀長谷雄と口論する語○

村上天皇菅原文時と詩を作りたまふ語○

延喜の御屏風に伊勢御息所の和歌を詠める語○

敦忠の中納言南殿の櫻を和歌に詠める語○

小野篁が隱岐國に流さるゝ時、和歌を詠める語○

參河守大江定基の許に來れる女の和歌を詠める語○

筑前守源道濟の侍の妻最後に和歌を詠みて死ぬる語○

平維茂の郎等の殺さるゝ語○

藤原親孝盗人に質を捕られ、頼信の言によりて免るゝ語○

頼光の郎等ども紫野に見物の語○

圓融院の御子口に参れる會禰好忠の語○

木寺の基増物咎めによりて、異名をつゝ語○

禪林寺の上座助泥破子闕きたる語○

中納言紀長谷雄の家に狗の顯はるゝ語○

大藏大夫藤原清廉猫を怖るゝ語○

筑前守藤原章家の侍が錯ちしける語○

信濃守藤原陳忠御坂に落ち入る語○

兵を立つる者わが影を見て、怖れをなす語○

幼兒瓜を盗みて、父の不孝を蒙る語○

陸奥國の狗山の狗大蛇を食ひ殺す語○

品賤しからぬ人妻を去りて、後返り棲む語○

兄弟二人萱草、紫莖を殖うる語○

今昔物語選目次終

解題

本書は、尨然たる今昔物語數十卷の中より、趣味ある談話四五條を採萃したるものなり。讀者はこれを繙くに當りて、まづ今昔物語の如何なる書なるかを知りおくを便宜とす。

今昔物語はすべて三十一卷あり、その中、數卷は今闕けて傳はらず。全篇を三部に分ち、一より五までを天竺、六より十までを震旦、十一以下を本朝の部とす。明治以前の版本にては、丹鶴叢書の中に本朝の部を收め、無比の善本と稱せらる。近頃、國史大系の中に天竺、震旦の部を補ひて、全部を剗削に付す。されど八、十七、十八、十九、二十、二十一の六卷を闕く。十七、十

九、二十の三巻はなほ寫本にて傳はるものありて、その後、世に出でし續史籍集覽にこれを載せたり。かくて一部の大方は容易く世人の手に入るること成りぬ。

この書を今昔物語といふは、每一段のはじめに、今は昔云々とあればなり。またその一名を宇治大納言物語ともいふは、この書の編者を宇治大納言隆國とすればなり。別に宇治大納言物語として、刊本三冊のものあり。この書は多少の増減はあれど、大やう小世繼といふものと同じ書にして、事實を伊勢物語、大和物語、紫式部日記等の古書より抄出したる後世の書なり。また佐藤誠實氏の説（史學雜誌掲載宇治拾遺物語考）によれば、そ

のはじめ宇治拾遺物語といへるも、即ち今昔物語のことにして、今の宇治拾遺物語はその名を襲ひて、建保年中に作り出でたるものなりといふ。今の宇治拾遺物語を建保年中のものとするは固よりさることなれど、宇治拾遺物語はそのもと今昔物語の一名なりとするは如何にや。また流布の木版本今昔物語三十巻は、享保年中、肥後熊本の井澤長秀の校訂にかゝるものにして、すべて日本部を載せたりといへども、著聞集、宇治拾遺、十訓抄等に出でたるは、省きて掲げず。文章また長秀が恣まに改竄し、通俗にしたるものにして、舊本の面目は殆ど存せず。これをもまことの今昔の姿と思はば、いみじき誤りなるべし。

4
今の宇治拾遺物語の序にいはく、

世に宇治大納言といふものあり。この大納言は隆國といふ人なり、西宮殿の孫、俊賢大納言の第二の男なり。年高うなりて、暑さをわびて、暇を申して、五月より八月までは、平等院一切經藏の南の山際に、南泉房といふ所に籠り居られたり。さて宇治大納言とは聞えけり。髻を結びわけて、をかしげなる姿にて、蓆を板にしきて、涼み居侍りて、大きな團扇をもて扇がせなどして、往來のたかき賤しきをいはず呼び集め、昔物語をせさせて、我はうちにそひ臥して、語るに従ひて、大きな草紙に書かれけり。天竺の事

もあり、大唐の事もあり、日本の事もあり、それがうちに貴き事もあり、哀れなる事もあり、穢き事もあり、少々は空物語もあり、利口なることもあり、さまざまやう／＼なり、世の人これを興じ見る。云々

このつゞきの文甚だ混らはしき書き様ながら、とにかくこの事は今昔物語の由來を説きたるものと覺ゆ。されど語るに従ひて草紙に書けるといふも、この物語に對しては當らず。この物語は天竺の事は佛典より、震旦の事は支那のさまざまの書より、日本の事も或はまたわが國の古書より抄出して、部類をわけて列記したるものにして、決して見聞のまゝに順序なく叙べたる

ものにあらず。隆國が暑さを宇治に避けたりといふことも、宇治民部卿の事を誤り傳へたるものと覺し。宇治民部卿は藤原忠文にして、炎暑の頃は、暇を請うて宇治の別業に居り、時には髪を宇治川に洗へる由、江談抄に見えたり。かくこの序文にかきたることの疑はしくば、今昔物語の編者を宇治大納言隆國といふことも、また疑はしきにや、如何。

この物語を隆國が纂めたりといふことは、古く鎌倉時代の初めより既にいへることにて、大方はかく信じてよろしきが如し。書中にかきたる事實より考へても、宛も隆國の頃に出來たること疑ひなきが如し。只一つ腑に落ちぬは、卷二十五に源義家朝臣

對_二清原武衡等_一語といへる題あり、但しその本文は闕けたり。このいはゆる後三年の役は、堀河天皇の寛治年中の事にして、隆國の歿後十餘年を過ぎたり。思ふにその前に前九年の役の記事ありしゆゑ、後人がこれに並べて、この題を擬入したるものと見るべくや。さてなほこれを隆國とせば、この隆國とは如何なる人ぞ。

源隆國の祖父は醍醐天皇の皇子にして、高明といひ、いはゆる西宮の左大臣なり。父は俊賢といひ、御堂關白時代の宮廷に才藝絶倫の譽ありし四納言の一人にして、その妹は高松上とて、即ち勢飛ぶ鳥を落すべき關白道長の室なり。俊賢の長子を顯基と

いひ、隆國はその次男なり。後一條天皇の萬壽二年、右近衛權中將に任ぜられ、長元二年、藏人頭に進み、後朱雀天皇の長久四年、權中納言となる。後冷泉天皇の永承六年、關白賴通の女皇后に冊立せられ、隆國皇后宮大夫となる。治曆三年、權大納言となり、白河天皇の承暦元年、七十四歳にして薨す。その宇治に別業を有せるを以て、世に宇治大納言と稱す。隆國嘗て賴通の宇治の第に詣り、小馬に乗りてその門に入る。家人これを咎めしかば、答へて曰く、わが穿ちしは馬にあらず、足駄なりと。賴通その機警を喜びて、またこれを咎めざりきといふ。隆國文學に通じ、また和歌をよくす。その詠、勅撰歌集に散見す。た

とへばその宇治に閑居せし折の歌にいたく、

宇治川の早瀬に波の聲すれば、

ふりくる雨を知る人もなし。

今昔物語の記事は佛經或は莊子などに見えたる架空の談もあり、また事實の謬まり傳はれるもありて、歴史的價値の貴きものにはあらず。されど眞偽はとまれ、讀むがまゝ、聞くがまゝに、事柄を叙して、意想を凝さず、また文字をも鍊らず。されば源氏物語に於て紫式部が慘澹たる意匠を察し、枕草紙に於て清少納言が奇警なる觀察を知るが如きことは、絶えて本書に望むべからず。本書は唯蕪雜なる客觀的記述にして、その文學的

價值は到底かの二書の十が一にも及ぶこと能はず。されど當時の事實を見聞のまゝに記せること多きを以て、本書は平安朝社會の寫眞なり。源氏物語。枕草紙に於て、われくが上流社會の風俗を覗ふが如く、今昔物語に於ては、上流より中下の階級のことまで、さながら眼前に見るが如し、本書は主觀的に著者の個想を察すること能はざれども、以て客觀的に當代社會の思想風俗を知るに足る。これを本書の第一の價值とす。而して余がこの選に抜き出でたるは、主として趣味饒多なる談にありて、また平安朝社會の一端をも覗ふべきものを取り、天竺、震旦の事は、わが國の普通の御伽話のやうになりたるものの起源を示

さんとして擇びたるものなど多し。

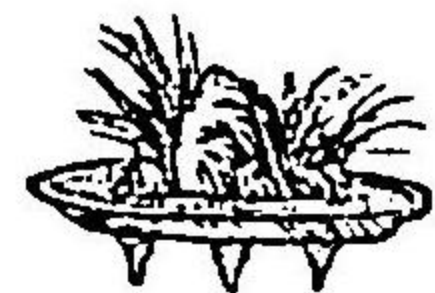
本書の文章は決して宜しとはあらず、章句の續けざまの正しからぬ、文字の誤りたるなど少しとせず。頗る粗笨なりとの非難は到底免れがたかるべしといへども、その素樸簡古の體、また野趣の掬すべきものあり。後の漢和混交文體の本書に則りたること少からざるを見れば、また賞翫に値すべし。余がこの選や、毎段の文は全く本書のまゝを擧げて、敢て増減せずといへども、文字の用ひ様、假名遣ひはふと心得がたきも多ければ、文字の誤りを正し、送假名を改めなどして、以て一般の讀者の繙讀に便ならしむ。但し漢字を訓すること奇古にして、何とな

くその頃のゆかしきは、そのまゝに存し置きて改めず。

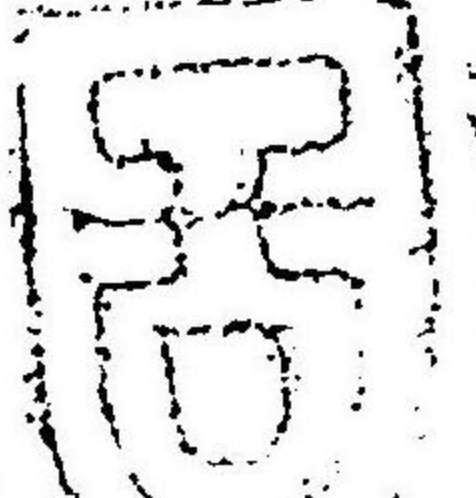
今昔物語一たび世に出ててより、これに倣ひて編述せる書少からず。されどいづれも今昔の具備せるに及ばず。これに倣へるものには十訓抄、古今著聞集等あり、著聞集の分類なども、概ね今昔に基きたり。宇治拾遺物語は或はまた隆國の纂めたるものなりと稱す。されど文體全く當時のものにあらずして、建保年中の作なること、前にいへるが如し。宇治拾遺といふ題目も、ふと見れば、宇治大納言物語の遺れるを拾ふといふやに聞ゆれど、全くさにあらず。その物語のうちの諸章の殆ど半ばは、今昔に出てたると同じ話にして、たゞ文章を今めかしくしたる

だけ異なり。かくの如く半ばは今昔の剽竊ともいふべければ、宇治拾遺は世にもてはやさるゝほどの價值なきものにして、却つて今昔をこそ貴ぶべけれ。この選には宇治拾遺に重出したる談は抄出せず。

巻頭の寫眞版は今昔物語古寫本の斷簡にして、故横山由清氏の遺品、今、關根正直氏の珍藏にかゝるものなり。



今昔物語語選



三獸菩薩の道を行ひて、兎身を焼

今昔物語 天竺に兎、狐、

狼の三つの獸ありて、共に誠の心を發

て、賤き獸と生れたり。これ前世に生ある者を哀まず、財物を惜みて人に與へず。かくの如きの罪深うして、地獄に墮ちて苦を久しく受けて、殘んの報いにかく生れたるなり。然ればこの度こ

今昔物語

の身を捨てむ。年我より老いたるをば、祖の如くに敬ひ、年我より少し進みたるをば、兄の如くにし、年我より少し劣りたるをば、弟の如く哀び、自らの事を捨て、他の事を先とす。天帝釋これを見たまうて、此等獸の身なりといへども、ありがたき心なり。人の身を受けたりといへども、或は生きたる者を殺し、或は人の財を奪ひ、或は父母を殺し、或は兄弟を讎敵の如く思ひ、或は咲ひのうちにも悪しき思ひあり、或は慈みたる形にも噴れる心深し。いかに況や、かくの如きの獸は實の心深く思ひ難し。然らば試みむとおぼして、忽ちに老いたる翁の無力にして羸れ術なげなる形に變じて、この三つの獸のある所に至り

たまひて、宣はく、我年老い羸れて爲む方なし。汝たち三つの獸我を養ひたまへ。我子なく家貧しくして食物なし。聞けば、汝たち三つの獸哀みの心深くありと。三つの獸この事を聞きて云はく、これ我等が本の心なり。速かに養ふべしと云ひて、猿は木に登りて、栗、柿、梨子、菜(棗?)、柑子、橘、栢、椿、檀、郁子、山女等を取りて持ち來り、里に出でては、瓜、茄子、大豆、小豆、大角豆、粟、稗、黍等を取りて持ち來りて、好みに隨ひて食はせ、狐は墓屋の邊に行きて、人の祭り置きたる糞炊、交鮑、鯉、種々の魚類等を取りて持ち來りて、思ひに隨ひて食はしむるに、翁既に飽満しぬ。かくの如くして日來を經る

今昔物語

に、翁の云はく、この二つの獸は實に深き心ありけり。これ既に菩薩なりけりと云ふ。兎は勵みの心を發して、燈を取り香を取りて、耳は高く瘦せずして、目は大きに、前の足短く、尻の穴は大きに開きて、東西南北を求め行けども、更に求め得たる物なし。然れば猿、狐と翁と且は耻しめ、且は蔑づり咲ひて、勵ませども、力及ばずして、兎の思はく、我翁を養はむが爲に、野山に行くといへども、野山怖しく、をぢなし、人に殺され、獸に噉はるべし。徒らに心にあらず身を失ふこと量りなし。ただ如かじ、我今この身を捨て、この翁に食はれて、永くこの生を離れむと思ひて、翁の許に行きて云はく、今我出でて甘美の

物を求め奉らんとす。木を拾ひて、焼きて待ちたまへと。然ら(れ?)ば猿は木を拾ひて來りぬ、狐は火を取りて來て、焼さつて、若しやと待つ程に、兎持つ物なくして來れり。その時に猿、狐これを見て云はく、汝何物をか持ちて來らむ。これ思ひつる事なり。虚言を以て人を謀りて、木を拾はせ、火を焼かせて、汝火を(に?)温りなむと、あな憎くと云へば、兎、我食物を求めて持ち來るに力なし。然れば只わが身を焼いて食ひたまふべしと云ひて、火の中に踊り入りて、焼け死ぬ。その時に天帝釋本の形に復して、この兎の火に入りたる形を、月の中に移して、普く一切の衆生に見しめんが爲に、月の中に籠めたまひ

今言物語

つ。然れば月の面に雲の様なる物のあるは、これ兎の火に焼ける烟なり。また月の中に兎のありと云ふは、この兎の形なり。萬の日月を見ん毎に、この兎のこと思ひ出づべし。

獅子猿の子を哀び、肉を割きて驚

に與ふる語

今は昔、天竺に深き山の洞に一つの獅子住みけり。この獅子心の内に思ふ様、われはこれ諸の獸の王なり。然れば諸の獸を護り哀まむと思へり。しかるにその山の中に二つの猿あり、妻夫なり。二つの子を生じて養育す。その子漸く成長するに、幼な

かりし時には、腹に懷き、一つをば背に負ひて、山野に行きて、菓臙を拾ひて養ひしに、成長して後は、この二つの子を懷き負ふに能はず。また山野に行きて、菓臙を拾はずば、子共を養はん事も絶えぬべく、我等が命を助けむ事も有りがたし。またこの子共を栖に置きて出でなむは、空より飛ぶ鳥も来て、食ひて去りなんとす、地より去る(走る?)獸も来て、取りて去りなむとす。かくの如く思ひ煩ひて出でぬ程に、瘦せ極じて餓死ぬべし。爲ん方を思ひ廻らすに、猿の思ひ得る様、この山の洞に一つの獅子住む。この子共の事を、この獅子に云ひ付けて、我等を(は?)山野に出でて、菓臙を拾ひて、子共を養ひ、我等が

今昔物語

命をも助けむと、思ひ得て、獅子の洞に行きて、獅子に云はく、獅子は諸の獸の王にまします。然れば諸の獸をば尤も哀みたまふべきなり。それに我も獸の端なり、哀みたまふべき内なり。しかるに我二つの子を生ぜり。幼なかりし時には、一つをば背に負ひ、一つをば腹に懷きて、山野に行きて、菓鹹を拾ひて、子共をも養ひ、我等が命をも助けき。それに子共漸く成長して後は、負ひ懷くにも堪へて、山野に罷り出でがたし。然れば既に子共もわが身も、共に命絶えなむとす。また然りとて、子共を置きて罷り行けば、諸の獸の爲に極めて怖し。然れば罷り行かぬ程に羸れ極じて、わが命も絶えぬべし。菓鹹を拾はんが爲に、

山野に罷り出でたらん間、この子共を獅子に預け奉らん。その程、平安に護りて置きたまはんと。獅子答へて云はく、汝が云ふところも、然るべきなり。速かに子共を將て來て、我が前に置くべし。汝等が還らむ間に、我護るべしと受けつ。猿喜びて、子共を獅子の前に置きて、心安く山野に走り出で、菓鹹を拾ひ行く。獅子は猿の二つの子を置きて、あから目もせず護り居たる程に、獅子聊かに居眠りたる程に、一つの鷲來て、洞の前なる木に隠れ居て、少し隙もあらば、この猿の子共を取りて去りなんと、思ひ居たる程に、獅子の居眠りたるを見て、飛び來りて、左右の足を以て、猿の二つの子を齧み取りて、木に居て喰

今昔物語

ひてんとする程に、獅子驚きて見るに、猿の子共乍ちに見えず。驚き騒ぎて、洞を出でて見るに、向うなる木に一つの鷲居て、この猿の子二つを、左右の足を以て一つづつ、噛み取りて、抑へて既に喰ひてんとす。獅子これを見て騒ぎ迷うて、かの木の本に行きて、鷲に向ひて云はく、汝は鳥の王なり、我は獸の王なり、互に心あるべし。それにこの洞の傍なる猿來りて云ふ様は、菓臈を拾ひて、子共を養ひ、わが命をも助けむとするに、二つの子共の不審きに依りて、思ひ煩ふを、山野に罷り出でたらむ程、この二つの子供護れとてなむ、預けて罷り出でぬるを、居眠りして侍りつる程に、此等を取りておはしにける。それ我に

免したまへ。既に事請けをして、此等を失ひてんずる事の、わが肝心を割く様に思へるなり。またわが事聞いてたまはざるべきにあらず。わが怒りをなして吠え啞らんには、汝だちも平かにおはしなむやはと。鷲答へて云はく、宣ふところ最も裁りなり。然れどもこの猿の子らは、わが今日の食に罷り當てたるなり。これを返し申しては、またわが今日の命絶ゆべし。獅子の御事の恐しく辱く思ふも、命を思ふ故なり。然らば返し申すべからず、これ命を助けむが爲なりと。獅子また云はく、宣ふ事また裁りなり。然らばこの猿の子の代に、わが突を與へむ。それを食して、今日の命を助けたまへと云ひて、わが劔の様なる

瓜を以て、わが股の穴を齧み取りて、猿の二つが大きさに丸がして、驚に與へつ。その後、猿の子を乞ふに、驚、然れば何でか返し申さざらんと、云ひて返しつ。獅子猿の子二つを得て、血穴になりて、本の洞に還りぬ。その時に、この猿の母菓齧を拾ひ集めて、還り來たり。獅子ありつる事を猿に語れば、猿涙を流すこと雨の如し。獅子の云はく、汝が云ふ事の重さにはあらず、約を受けて違へん事の、極めて怖しければなり。また我は諸の獸を哀ふ心深しとぞ云ひける。その獅子と云ふは、今の釋迦佛これなり、その雄猿といふは、今の迦葉尊者なり、雌猿といふは、今の善護比丘尼なり、二つの猿の子といふは、阿難、羅睺

羅なり、驚といふは、今の提婆達多これなりとなむ、語り傳へたるをや。

狐自ら獸王と稱し、獅子に乗りて

死ぬる語

今は昔、天竺に一つの古寺あり。一人の比丘ありて、一つの僧房に住して經を讀む。一つの狐ありて、この經を聞く。その經に云はく、凡そ人も獸も心を高く仕へば、物の王と成ると。狐これを聞きて思ふ様、われ心を高く仕うて、獸の王と成らんと思うて、その寺を出でて行くに、一つの狐に値ひぬ。頸を高く持

ち上げて、この狐を脅す。本の狐の氣色の高きを見て、今の狐
 畏れて居たり。然れば本の狐居たる狐を召し寄せて、背に乗り
 ぬ。さて行く程にまた狐に値ひぬ。値ひたる狐の見るに、狐に
 乗りたる狐の氣色高くもてなしたれば、これは様ある物なめり
 と思つて、畏まりて候ふ。その狐を召して、乗る狐の口を取ら
 す。かくの如く値ふ狐どもを皆具足になして、左右の口を張り、
 千萬の狐を尻に随へて行くに、犬に値ひぬ。これを見て思ふ様、
 これは物の王なり。畏ならんと思つて「と思つて畏りて」候ふを、狐
 の如く召し寄す。諸の犬集りぬれば、犬に乗りて、犬を以て口を
 取らす。次に虎、熊を集めて、それに乗りぬ。かくの如く諸の獸

を集めて、眷屬として道を行くに、象に値ひぬ。象も怪んで傍
 に畏まりて候ふを、召して象に乗りぬ。かくの如く多くの象を
 集む。狐より始めて象に至るまで、諸の獸を随へて、その王と
 なりぬ。次に獅子に値ひぬ。獅子これを見るに、象に乗りたる
 狐の千萬の獸を具足して渡れば、様ある物なめりと思ひて、獅
 子道の傍に膝を曲げて、畏まりて候ふ。狐の身にては、かくば
 かりにて極まりたるを、心の餘りに、かくの如く多くの獸を随へ
 たらば、獅子の王とならむと思ふ心ありて、獅子を召し寄す。
 獅子畏りて參ず。狐獅子に云はく、われ汝に乘らむと思ふ。速
 かに乘らしむべしと。獅子申さく、諸の獸の王となりたまへれ

今物語

ば、いかにも申すべしにあらず。疾く奉るべしと。狐の思はく、
 狐の身を以て、象の王とならむそら「そら」は即ち「すら」なり。思ひ懸けぬ事な
 り。それに獅子の王とならむ事は希有の事なりと思ひながら、
 獅子に乗りぬ。彌々頸を高く持ち上げて、耳を指し、鼻を吹き
 いらしがして、世間を事にもあらず見下して、獅子に乗りて、
 象に左右の口を取らせて、今は多くの獅子を集めむと思ひて、
 廣き野を渡る。その時に象より始め諸の獸の思はく、獅子は猶
 聲を聞くそら、諸の獸皆心を迷はし肝を碎いて、半ば死ぬる
 者なり。しかるにわが君の御徳に、かく俱達となりて、ひとへ
 に交はりてある事は、思ひ懸けぬ事なりと思ふ。獅子は必ず日

に一度吠ゆ。しかるに日の午時になる程に、獅子俄かに頭を高
 く持ち上げて、鼻を吹きいらして、眼の光り煩はしく見なし
 て、齧平みかへりつゝ、見廻はし眠るに、凡そ象より始めて諸の
 獸、いかなる事のあるべきにか有らんと思ふに、半ば死ぬる心地
 して、身冰る様にす。乗りたる狐も、獅子のかく頸の毛をいら
 らげ、耳を高く指すを見るに、轉じ落ちぬべく思へども、心を
 高く仕うて、我は獅子の王と思ひなして、背に曲まり居たる程
 に、獅子雷の鳴り合ひたる様なる聲を打ち放ちて、足を高く持
 ち上げて、遙かに吠え喰る程に、乗りたる狐逆様に落ちて死す。
 口取りたりつる象より始めて、若干の獸、皆一度に倒れて、死

今言物語

に入りたり。その時に獅子の思ふ様、この乗りたりつる狐は、
 獸の王と思つてこそ乗せつれ。わがかく事にもあらぬ程の聲を
 出だして、少し吠えたるに、かく落ちて、迷うて死に入る。ま
 してわが噴りをなして、前の足して土を掻き掘りて、大音を放
 ちて吠えたらむには、堪へがたかりなむもの。思はぬ婢に計ら
 れて乗せてけりと思つて、山の方へやはら「やはら」や「さし」
 みて入りけり。その時になむ、この死に入りたりつる獸ども、
 皆蘇りて、われにもあらぬ氣色にて、逃げて還りにけり。こ
 の乗りたりける狐は死に畢てにけり。他の獸共の中にも死に畢
 てぬるもあり。然れば象ばかりにいと善かりつるを、獅子に飛

るが、餘り事にて有るなり。人も身の程に合はて過ぎたる事は
 止むべしとなむ、語り傳へたるをや。

舍衛國の鼻缺猿帝釋を供養する話

今は昔、天竺の舍衛國に一つの山あり、その山に一つの大きな
 樹あり、その樹に千の猿住す。皆心を一つにして、天帝釋を
 供養し奉りけり。その猿九百九十九は鼻なし、今一つの猿は鼻
 あり。この諸の鼻なき猿集まりて、一つの鼻ある猿を喚ひ蔑づ
 ること限りなし。汝はこれ片輪者なり。我等が中に交はるべか
 らずと云ひて、同じ所にも居らしめず。然ればこの一つの猿歎

今昔物語

き陀ぶる程に、九百九十九の猿種々の珍菓を備へて、帝釋に供養し奉るに、帝釋これを受けたまはずして、この一つの鼻ある猿の供養の物を受けたまひつ。その時に九百九十九の猿帝釋に向ひて申さく、何の故ありてか、我等が供養を受けたまはずして、片輪者の供養を受けたまふや。帝釋答へて云はく、汝等九百九十九は前世に法を謗りたる罪に依りて、六根を全く具せずして、鼻なき果報を得たり。一つの猿は前世の功德に依りて、六根を全く具せり、只愚痴にして師を疑ひしに依りて、暫く畜生の中に生れたるなり。速かに佛道に入らん。汝等九百九十九は片輪者として、麗はしき者を咲ひ蔑ぶるなり。此に依りて汝等

が供養の物は受けずと。この事を聞いて後より、九百九十九の猿わが身の根の缺けたる事を観じて、一つの猿を咲ひ蔑ぶること絶えにけり。この譬へを以て、懈怠放逸なる衆生の、精進持戒の人を誹謗するに准へて、佛の説きたまふなりけり。また世の人の鼻缺猿と云ふは、この事を云ふとなん、語り傳へたるとや。

龜鶴の教へを信ぜず、地に落ちて

甲を破る語。

今は昔、天竺に世間早魅して、天下に水絶えて、青き草葉もな

今昔物語

時ありけり。その時に一つの池あり、その池に一つの龜住す。
 池の水早り失せて、その龜死ぬべし。その時に一つの鶴のこの
 池に来て喰ふ。龜出でて鶴に會うて相語つて云はく、汝と我と
 前世の契りありて、鶴龜一雙に名を得たりと、佛説きたまへり。
 經教にも、萬の物の譬へには、鶴龜を以て譬へたり。しかるに
 天下早魃して、この池の水失せて、わが命絶えぬべし。汝われ
 を助けよと。鶴答へて云はく、汝が云ふところ二つなし、われ
 理を存せり。實に汝が命明日に過ぐべからず、極めて衰れに
 思ふ。われは天下を高くも下くも飛び廻ること、心に任せたり。
 春は天下の草木の花葉色々にしてめでたきを見る。夏は農業種

種に生ひ榮えて様々なるを見る。秋は山々の荒野に紅葉の妙な
 るを見る。冬は霜雪の寒水山川、江河に水凍りて鏡の如くなる
 を見る。かくの如く四季に隨うて、何物か妙にめでたからざる
 物はある。乃至極樂界の七寶の池の自然の莊嚴をもわれ皆見る。
 汝は只この小池の萬内(案内?)だに知りがたし。汝を見るに、
 實にいと惜し。然れば汝が云はざる前に、水の邊に將て行かん
 と思ふ。但しわれ汝を背にも能はず、抱かんに力なし、口に
 胸へんも便りなし。只爲べき様は、一つの木を汝に胸へしめて、
 我等にして木の本末を胸へて、將て行かんと思ふに、汝はもと
 より極めて物痛く云ふものなり。汝われに問ふ事あり、またわ

今昔物語

れも誤りて云ふ事あらば、互に口開きなば、落ちて汝が身命は損はれなむ、いかゞと云へば、龜答へて云はく、將て行かむと宣はば、われ口を縫うて、更に云ふ事あらじ。世にある者の身思はぬやはある。鶴の云はく、付きぬる病は失せぬものなり、汝猶信ぜじと。龜の云はく、猶更に云はじ、猶將て行けと云へば、鶴にして龜に木を胸へしめて、鶴にして木の本末を胸へて、高く飛び行く時に、龜池の萬内に習うて、未だ見も習はぬ所の、山、川、谿、峯の色々にめてたきを見て、極めて感に堪へずして、こゝはいつこぞと云ふ。鶴もまた忘れてこゝかといふ程に、口開きにければ、龜落ちて身命を失ひてけり。これに依つて物

痛く云ひ習ひぬるものは、身命をも願みざるなり。佛の守口攝意身莫犯等の文は、これを説きたまふなるべし。また世の人不信の龜は甲破ると云ふは、この事を云ふとぞ、語り傳へたるをや。

龜猿の爲に謀らるゝ語

今は昔、天竺の海邊に一つの山あり。一つの猿ありて、菓を食して世を過す、その邊の海に二つの龜あり、夫妻なり。妻の龜夫の龜に語りて云はく、われ汝が子を懐妊せり、しかるにわれ腹に痛みありて定めて、難産ならむ。汝われに藥を食はせば、

今昔物語

わが身平かにて、汝が子を生じてむと。夫答へて云はく、何を以て薬とは爲べきと。妻の云はく、われ聞けば、猿の肝なむ腹の痛みの第一の薬なると云ふに、夫海の岸に行きて、かの猿に値うて云ふ様、汝が棲には、萬の物豊かなりや否やと。猿答へて云はく、常には乏しきなり。龜の云はく、わが栖の近邊にこそ、四季の菓鹹絶えぬ廣き林はあれ。あはれ汝を其所に將て行きて、飽くまで食はせばやと。猿謀るをば知らずして悦びて、いでわれ行かんと云へば、龜然らばいざ給へと云ひて、龜の背に猿を將て行きて、龜の猿に云はく、汝知らずや、實にはわが妻懷妊せり。しかるに腹に病あるに依りて、猿の肝なむその薬なると

聞いて、汝が肝を取らむが爲に謀りて、將て來れるなりと。猿の云はく、汝甚だ口惜し、われを隔つる心ありけり。未だ聞かずや、我等が黨はもとより身の中に肝なし、只傍の木に懸け置きたるなり。汝かして云はましかば、わが肝また他の猿の肝を取りて進めまし。たとひ自ら殺したまひたりとも、身の内に肝のあらばこそ、その益は有らめ。極めて不便なる態かなと云へば、龜猿の云ふ事を實と信じて、然らばいざ將て還らむ。肝を取りて給へと云へば、猿、そはいと安きことなり。ありつる所へだに行き着きなば、事にもあらぬことなりと云へば、龜前の如く背に乗せて、もとの所に到りぬ。うち下したれば、猿下る

る一々(まゝ)に、走りて木の末に遙かに昇りぬ。見下して猿
 龜に向うて云はく、龜はかなしや、身に離れたる肝もやあると
 云へば、龜早く謀りつるにこそありけれと思つて、爲べき方な
 くて、木の末に有る猿に向うて、云ふべき様なさまに、うち見
 上げて云ふ、猿はかなしや、いかなる大海の底にか葉はある
 と云ひて、海に入りけり。昔も獸はかくはかなくぞありける、
 人も愚癡なる此等の如し。かくなむ語り傳へたるとや。

象足を株に踏み立てて、人して拔ぬ

かしむる語

今は昔、天竺に一人の比丘ありけり。深き山の中を通る間に、
 遙かに大象を見て、比丘恐れをなして、高き木に急ぎ昇りて、
 茂き葉の中に隠れ居たる程に、象木の下を通る。比丘隠れ得た
 りと思ふに、象不意に見つけつ。比丘彌々恐るゝ程に、象木の
 本に寄り來て、鼻を以て木の根を掘る。比丘は佛を念じ奉り
 て、われを助けたまへと思ふ程に、木の根を深く掘りつれば、
 木既に倒れぬ。その時に象來て、比丘を鼻に搔き懸けて、遙か
 に指し上げて、彌々深き山の奥へ將て行く。比丘今は限りと思
 ふに、東西を知らず。しかる程に山の奥深く入りて見れば、ま
 たこの象よりも器量大きなる一つの象あり。その象の許に比丘

今昔物語

を將て行きて、うち置きつ。比丘の思はく、早うわれをばこの
 大象に食はしめむとて、將て來たるなりけりと思うて、今や喰
 ふ喰ふと待ちたる程に、この大象もこの象の前にして臥し轉び、
 悦ぶこと限りなし。比丘これを見るにつけても、我を將て來た
 りとて、悦ぶなめりと思ふに、更に生きたるにもあらず。比丘
 この大象を見るに、足を指し延べて立ち上らず。よく見れば、
 足に大きな株を踏み貫きたり。その足を比丘のある所にさし
 遣せて悦べば、比丘若しこの株を抜けと思ふにや有らむと心得
 て、株を捕へて、力を發して引き抜けば、株ぬけぬ。その時に
 大象彌々悦びて、臥し轉ぶこと限りなし。比丘も抜かせむ故な

りけりと思ふに心安く(し?)、その後もこの象比丘をまた鼻に
 引き懸けて、遙かなる所へ將て行くに、大きな墓あり。その墓
 に將て入りぬ。比丘怪しと思へども、入りて見れば、財多かり。
 比丘は株を抜きたる喜びに、この財を得さするなりけりと思
 うて、恐る**恐る**この財を皆取りて出でぬれば、象もまた鼻に搔き
 懸けて、ありし木の本に將て行きて、うち下しつ。象は山の奥
 へ行きぬ。その時になむ、比丘心得ける。早う大きな象はこ
 の象の祖なりけり。祖の足に株踏み貫きたるを抜きなるとて、
 比丘をば將て行きたりけるなり。さてその株抜きたる悦びに、
 この財どもを得さするなりけり。比丘思ひ懸けぬ財を得て、も

今寄物語

との所に還りにけりとぞ、語り傳へたるとや。

七十餘りの人を他國に流し遣る語

今は昔、天竺に七十に餘る人を他國に流し遣る國ありけり。その國に一人の大臣あり、老いたる母を相具したり。朝暮に母を見て、孝養すること限りなし。かくの如くして過ぐる間に、この母既に七十に餘りぬ。朝に見て夕に見ぬを、尙不審さ堪へがたし。いかに況や遙かなる國に流し遣りて、永く見ぬこと、更に堪ふべきにあらずと思つて、子の大臣密かに土の室を掘りて、家の角に隠し居るつ。家の人そらこれを知らず、况や世の

人知ることなし。かくて年を経る程に、隣の國より同じ様なる牡馬二疋を遣せて云はく、この二疋が祖子を定めて注し遣はすべし。若し然らずば、軍を發して、七日の内に、國を亡ぼさんと云ひたり。その時に國王この大臣を召して、この事をいかが爲べき、若し思ひ得たることあらば申せと仰せたまふ。大臣の申さく、この事輒く申すべきことにあらず、罷り出でて、思ひ廻らして申すべしと云ひて、心の内に思ふ様、わが隠し置きたる母は、年老いたれば、かくの如きの事聞きたることやあらんと思ひて、急ぎ出でぬ。忍びて母の室に行きて、然々の事なんある、何様にか申すべき。若し聞きたまひたることやあると云

今昔物語

ふに、母答へて云はく、昔、若かりし時に、われこの事を聞き
 き。同じ様な馬の祖子を定むるには、二つの馬の中に草を置
 きて見るべし。進みて起ちて食ふをば、子と知り、任せてのど
 かに食ふをば、祖と知るべし。かく様にぞ聞きしと云ふ。聞き
 て還り参りたるに、國王の何と思ひ得たると問ひたまふに、大
 臣母の言の如く、かく様になん思ひ得て侍ると申す。國王尤も
 然るべしと宣ひて、忽ちに草を召して、二つの馬の中に置きて
 見るに、一つは起き食ふ、一つはこれが食ひ棄てたるをのどか
 に食ふ。これを見て祖子を知りて、各々札を付けて還し遣はし
 つ。その後、また同じ様に削りたる木の漆塗りたる木を遣せて、

これが本末を定めよとて奉れり。國王この大臣を召して、ま
 たこれをば何とすべきと問ひたまへば、大臣前の如く申して出
 でぬ。母の室に行きて、また然々の事なると云へば、母の
 云はく、それはいと安きことなり。水に浮めて見るに、少し沈
 む方を本と知るべしと。大臣返り参りて、この由を申せば、即
 ち水に入れて見たまふに、少し沈む方を本と付けて遣はしつ。
 その後また象を遣せて、この象の重さの員計へて奉れと申し
 たり。その時に、國王かくの如く云ひ遣するは、いみじき態かな
 と、おぼし煩うて、この大臣を召して、これはいかゝ爲べきと、
 今度は更に思ひ得がたきことなりと。大臣も、實にしか侍ること

今昔物語

なり、然りといへども、罷り出でて、思ひ廻らして申し侍らんと、云ひて出でぬ。國王おぼす様、この大臣わが前にても思ひ得べきに、かく家に出でつゝ思ひ得て来るは、頗る心得ぬことなり。家に何たる事のあるにやと、思ひ疑ひたまふ。しかる間、大臣還り参りぬ。國王この事をも心得がたくや有らむと思ひて、何ぞと問ひたまへば、大臣申して云はく、これも聊かに思ひ得て侍り。象を舟に乗せて水に浮べつ。沈む程の水際に墨を書いて注をつけつ。その後象を下しつ。次に舟に石を拾ひ入れつ。象を乗せて書さつる墨の處に水量る。その時に石を量に懸けつ。その後石の敷を總て計へたる敷を以て、象の重さに當て

て、象の重さは幾ばくありと、云ふことは知るべきなりと申す。國王これを聞きて、その言の如くにし計りて、象の重さ幾ばくなむあると書いて、返し遣はしつ。讎の國には、三つの事の知りがたきを、よく一事を替へて、毎度に云ひ返したれば、その國の人限りなく褒め感じて、賢人多かる國なりけり。おぼろげの有才ならむ者は、知るべくもあらぬ事を、かくのみ云ひ當てて遣すれば、賢かりける國に、讎の心發しては、返りて謀られて討ち取られなん。然れば互に隨ひて中よかるべきなりと、年來挑みつる心永く止めて、その由を牒じ通はせて、中よくなりぬれば、國王この大臣を召して宣はく、この國の耻辱をも止め、

今言物語

讎の國をも和らげつる事は、汝大臣の徳に依りて有ることなり。
 われ限りなく悦び思ふ。但しかくの如き極めて知りがたき事を
 善く知れる、何にと。その時に、大臣目より涙の出づるを、袖
 して押し巾うて、國王に申さく、この國には往古より七十に餘
 りぬる人をば、他國へ流し遣ること、定まれる例なり、今始め
 たる故にあらず。しかるに己が母七十に罷り餘りて、今年に至
 るまで、八年に滿ちぬ。朝暮に孝養せむが爲に、密かに家の内
 に土の室を造りて、置きて候ひつるなり、それに年老いたる者
 は、聞き廣く候へば、若し聞き置きたる事や候ふと、罷り出で
 つ、問ひ候ひて、その言を以て、皆申し候ひしなり。この老人

候はざらましかばと申す時に、國王仰せたまふ様、いかなる事
 に依りて、昔よりこの國に老人を捨つる事ありけん。今はこれ
 に依りて事の心を思ふに、老いたるを貴ぶべきにこそありけれ。
 然れば遠き所へ流し遣りたる老人共を、貴賤男女皆召し返すべ
 き宣言を下すべし。また老を捨てつと云ふ國の名を改めて、老
 を養ふ國と云ふべしと、下されぬ。その後、國の政平かに
 なりて、民穩かにして、國の内豊かなりけりとなむ、語り傳へ
 たることや。

震旦の孟宗老母に孝して冬の
筍を得たる語

今は昔、震旦の代に、江都に孟宗と云ふ人ありけり。その父なくして、母存せり。孝養の心深うして、老母を養ふに、思なることなし。この母世を経て、筍なければ飲食することなし。然れば孟宗年來の間、朝暮の備へに筍を構へ求めて、供給して闕くことなし。筍の盛りなる時に、求め得ること易し、筍の不生なる時に、東西に馳走して、掘り出だして母を養ふ。しかる間、冬の頃雪、高くふり積り、地いたく凍り塞ぎて、筍を掘り出

でむに堪へざる朝に、母に筍を備へず。これに依りて母食時を過ぐといへども、飲み食はずして居たり。孟宗これを見て、天に向ひて歎いて云はく、われ年來の間、母を養はむが爲に、朝暮に筍を求めて供給して、闕くことなかりつ。今日の雪高く地凍りて、筍を求むるに得ず。これによりて母食事を過ぐといへども、飲み食はず。老亂の身に飲み食はず、既に死なんとす。悲しいかな、今日の筍を備へぬ事と云ひて、泣き悲むこと限りなし。その時に庭の中を見れば、忽ちに紫の色の筍三本、自然に生ひ出でたり。孟宗これを見て、わが孝養の心深きを以て、天の哀んで給へるなりけりと、思ひ喜び、取りて母にこれ

今昔物語

を備ふるに、母亦喜びて、飲食すること例の如し。これを知りて、
人、孝養の深きことを貴んで讃めけりとなん、語り傳へたると
や。

震旦の張敷死にし母の扇を見て、

母を戀ひ悲む語

今は昔、震旦の張敷と云ふ女人ありけり。生れて一歳の時、そ
の母死せり。その後、張敷長大して、すでに十歳に至る時、張
敷家の人に問うていはく、人はみな母あり、何ぞわれ一人母な
きぞと。家の人答へていはく、君知りたまはずや、君の母は、

君生れて一歳の時、はやく死にたまひにきと。張敷これを聞い
て、涙を流して悲んでいはく、悲しいかな、わが母を見ざる事。但
しわが母存生の時、もしわが爲に遺し置きたまへる財あるかと。
家の人のいはく、繪かきたる一つの扇あり。これ君の母の存生
の時、君の長大したまはむ時、たてまつれとて、納め置きたま
へるところなりと云ひて、扇をとり出でて與ふ。張敷これを見
て、いよく泣き悲んで、母を戀ふこと限りなし。その後は、
毎日にこの扇を取り出でて見つ。涙を流して戀ひ悲んで、見て
後は、玉の箱の中に納め置く。張敷母の形を見ず、恩を知らず
といへども、おのづから母の契りを知りて、戀ふに戀ふる心深

今言物語

し、形を見、言を聞きたらしむすら、年月を経て忘れむことは、世の習ひなり。しかるに張敷常にその扇を見て、忘るゝことななくして、一生の間、戀ひ悲みけり。この事を聞く人、また張敷を讃め哀まずといふ事なかりけるとなむ、かたり傳へたることや。

震旦の韓の伯瑜母の杖を負うて

泣く語

今は昔、震旦の宋の代に、韓の伯瑜韓は姓といふ人ありけり。幼稚なりける時、その父死にけり。しかれば母と共に家にありて、懇ろに母を養ふ間、伯瑜少しの過ちある時には、母嗔りて、杖を以て伯瑜を打ちて呵嘖す。伯瑜杖を負ふに、身痛しといへ

ども、心に忍びて、泣くことなし。これ常のことなり。しかる間、母既に年老い身衰へて後、伯瑜を打つ時に、痛きことなし、然るに伯瑜杖を負うてなく。その時に、母この事を怪しんで、伯瑜に問うて云はく、われ年來常に汝を打つに、杖を負ふといへども、汝泣くことなかりつ。しかるに今何ぞわが杖を受けて泣くぞと、伯瑜答へて云はく、年來はわれ君の杖を負ふに、身の痛しといへども、よく心に忍びて、泣くことなかりつ。しかるに今日の杖を負ふに、杖の當るところ強からずして、年來に似ず。これ母の年老いて力の衰へて、弱くなれるが故なりと思ひ、悲しさに依りて泣くなり。その時に母このことを聞いて、

今昔物語

わが杖を負うて、痛みて泣くなりと思ふに、わが年老いて力の弱れるを悲んで、泣くなりけりと知りて、母伯瑜を哀み悲むこと限りなし。これを聞く人、伯瑜が心を讚め感じて、孝養の心深さに依りて、わが身の痛さを忍びて、母が力の弱れるを悲むなりけるとなむ、かたり傳へたるをや。

朱の百年母を悲むが爲に、寒夜の

衾を脱ぐ語

今は昔、震旦の□代に、朱の百年といふ人ありけり。幼稚の時より孝養の心深くして、専に父母に供給す。父先に死す、

母ひとり家あり。しかるに百年家極めて貧しくして。一塵の貯へなし、しかる間、百年友とある人の家に行く。家の主百年が來れるに、饗を膳へて、酒を吞ましむ。百年酒を吞みて、よく酔ひぬれば、家に還ることなくして、その家に臥しぬ。その時、大寒の頃なり、夜極めて寒し。しかれば家の主衾を取り出でて、百年に覆ひぬ。その時、百年驚きさめて見るに、わが上に衾を覆へり。百年の思はく、わが寒の氣色を見て、家の主の衾を覆へるなりと知りて、すなはち衾を脱ぎ棄てて、服ずして臥したり。家の主來て、百年が衾を脱いで服ざるを見て、怪んで百年に問うて云はく、君何ぞ寒の夜、衾を覆へるを、脱ぎ棄てて服

今昔物語

ざるぞと。百年答へていはく、われ寒の夜、旅に臥したり。君その心を知りて、衾を以てわれに覆へり。これ勤ろの志なり、わが専らに喜ぶところなり。しかれどもわが母極めて寒くして、家に獨り宿すらむ。我これを思ふに、心安からず。何ぞわれ母が寒宿を知らずして、衾を覆はれて、煖かにして臥さむと。家主このことを聞いて、涙を流して泣き悲んでいはく、君が孝養の心深きこと、實に有りがたし、われ深く貴ぶと。夜曙けて百年家に歸りぬ。母またこの事を聞いて、涙を流して、悲むこと限りなし。これを聞く人、また百年を讃め感じけりとなむ、語り傳へたるとや。

震旦の厚谷父を謀りて、不孝を止むる語

今は昔、震旦の□代に、厚谷といふ人ありけり、楚の人なり。その厚谷が父不孝にして、父の遅く死することを常に厭ふ。しかる間、厚谷が父一つの輿を造りて、老いたる父を乗せて、この厚谷と共に、これを荷うて、深き山の中に將て行きて、父を棄て置きて、家に歸りぬ。その時に、厚谷この祖父を乗せたりつる輿を家に持ち歸りたり。父これを見て、厚谷に云はく、汝何の故にその輿を持ち歸るぞと。厚谷答へて云はく、人の子は、老いたる父をば輿に乗せて、山へ棄つるものなりけりと知りぬ。

今昔物語

然ればわが父をも、老いなむ時に、この輿に乗せて山に棄てむ、
 また更に輿を造らむよりはと。父これを聞きて、然らば老いな
 む時、必ず棄てられなんぞと思つて、怖れ迷うて、すなはち山
 に行きて、父を迎へて將て歸りにけり。その後は、厚谷が父老
 父に孝養すること愚かならず。これ偏へに厚谷が謀に依りて
 なり。然れば世擧りて厚谷を譽め感ずること限りなし。祖父の
 命を助け、父に孝養をなさしむ、これを賢き人と云ふべしとな
 む、語り傳へたるや。

長安の女夫に代りて、枕を違へて
 敵の爲に殺さるゝ語

今は昔、震旦の□代に、長安に一人の女ありけり、形美麗に
 して心正直なり。その女に夫あり、その夫に敵あり。その敵こ
 の女の夫を殺さむが爲に、その家に來れり。その時に、その夫
 他所に行きて、その家になし。敵見るに夫なければ、妻の父を
 捕へて縛る。女父縛られたりと聞いて、内より出でたり。敵女
 を見て告げて云はく、われ汝が夫を殺さむが爲に、此に來れり。
 しかるに汝が夫なし。汝若し夫を出ださずば、汝が父を殺さむ

今昔物語

とすと。女敵に答へて云はく、豈夫の無き故に、父を殺す事
 あらむや。然れば君わが言に隨うて、後の時に、この家に來て、
 わが夫を殺すべし。この寢屋に、夫は東枕に臥し、われは西
 枕に臥すなり。後に來らむ時、東枕にならむ夫を殺すべしと。
 敵この事を聞いて、父を免して去りぬ。その後、夫來れり。妻
 夫に語りて云はく、今夜はわれ東枕に臥さむ、君は西枕に臥せ
 と、云ひて臥す。すなはち敵入り來て、東枕なる妻を、これ夫
 なりと思ひて、殺しつ。その時、敵既に妻を殺せり、夫は命を
 存せり。敵これを見て、痛み歎くこと限りなし。然ればこれ妻
 の夫に代りて、枕を替へて殺さるゝなりけりと知りぬ。その後、

敵大きにこれを哀んで、永く怨みの心を止めて、始めて骨肉の
 契りをなしけり。然れば昔はかくの如くわが身を棄てて、夫の
 命を生くる女人ありけり。これ極めて有りがたき事なりとぞ。
 聞く人皆云ひけるとなむ、語り傳へたるとや。

關寺の駝牛に化したる迦葉佛の語

今は昔、左衛門大夫平朝臣義清と云ふ人ありけり。その父
 は中方と云ふ。越中守にてありける時、その國より黒き牛一頭
 得たり。中方年來これに乗りて行くほどに、清水に相知れる僧
 のあるに、この牛を與へつ。その清水の僧この牛を大津にある

今昔物語

周防掾正則と云ふものに與へつ。しかる間、關寺に住む聖人の關寺を修造する間に、この聖人雜役の空車を持ちて、牛のなきを見て、正則この牛を聖人に與へつ。聖人この牛を得て、喜んで車に懸けて、寺の修造の料の材木を引かしむ。材木皆引き畢りてのちに、三井寺の明尊、前の大僧都にて、夢に、自ら關寺に詣づ。一つの黒き牛あり、堂の前に繋ぎたり、僧都これは何ぞの牛ぞと問ふに、牛答へて云はく、吾はこれ迦葉佛なり。然るにこの關寺の佛法を助けむが爲に、牛となりて來れるなりと、云ふと見る程に、夢覺めぬ。僧都これを恠んで、明くる朝に、弟子の僧一人を以て關寺に遣る。教へて云はく、若し寺の材木引

く黒き牛や、その寺に有ると、問うて來れと。僧關寺に行きてすなはち歸り來て云はく、黒き大いなる牛の、角少し平みたる、聖人の房の傍に立ちたり。これは何ぞの牛ぞと問へば、聖人の云はく、この寺の材木引かむが爲に儲けたる牛なりと。僧歸りて、その山を僧都に申す。僧都これを聞いて、驚き貴みて、三井寺より多くのやむむとなき僧共をひきゐて、歩行にて關寺に詣て、まづ牛を尋ぬるに、牛見えず。牛いかにぞと問へば、聖人、飼はむが爲に、山の方へ遣はしつ。速かに取りに遣るべしと云うて、童を遣りつ。牛童に違うて、堂の後の方に下り來れり。僧都取りて將て來れと宣ふ程に、牛取られず。僧都心敬

今昔物語

ひ貴みて云はく、速かに取るべからず、唯離れて行きたまはむ
 を禮むべきなりとて、恭敬拜禮すること限りなし。他の僧共も
 皆禮拜す。その時に、牛堂を右に三匝り廻りて、庭に佛の御前に
 向うて臥しぬ。僧都より始めてこれを見て、佛を三匝り廻る。
 これ希有の事なりと云うて、彌々貴ぶ。その中に、聖人だちた
 る僧共は、皆泣きぬ。かくの如くして、僧都歸りぬ。その後、
 この事世に廣く聞えて、京中の人首を擧げて詣てずと云ふこと
 なし。入道大相國より始め奉りて、公卿殿上人皆詣てぬ人なし。
 しかるに小野宮の實資の右大臣のみぞ参りたまはざりける。閑
 院太政大臣公季と申す人参りたまうて、下人共の遣らむ方なく

多かりければ、車より下りて入らむが、頗輕々におぼえたま
 ひければ、車に乗りながら、牛屋の程近く車を引き寄せたるに、
 この牛寺の内に、車に乗りながら入りたまへるを、罪得がまし
 くやおぼえけむ、俄かに索を引き切りて、山様に逃げ去りぬ。
 太政大臣これを見たまひて、下り居て云はく、乗りながら入り
 つるを、无禮なりと思ひて、この牛の逃げぬるなりと、悔い悲
 びて、泣きたまふこと限りなし。その時に、かく懺悔したまふ
 を、哀れとや思ひけむ、牛漸く山より下り來て、牛屋の内に臥
 しぬ。その時に、太政大臣草を取りて牛に含めたまふに、牛殊
 に草も食はで臥したる心地に、この草を含めば、太政大臣直衣

今言物語

の袖を面に塞ぎて、泣きたまふこと限りなし。見る人も皆貴がりて泣きぬ。女房は鷹司殿、關白殿の北の方皆参りたまへり。かくの如く、四五日の間、首を擧げて、諸の上中下の人参り集まる程に、聖人の夢に、この牛告げて云はく、われこの寺の事勤め畢んぬ。今は明後日の夕方歸りなむとすと云ふと見て、夢覺めて泣き悲んで、三井寺の僧都の許に詣でて、この由を告ぐ。僧都の云はく、この寺にもしかる夢見て語る人ありつ。哀れなる事かなとて、泣くく貴ぶ。その時に、この事を諸の人聞き續ぎて、彌々詣づること、道隙なし。その日になりて、山、三井寺の人参り集まり、阿彌陀經を讀むこと、山を響かす。昔の沙

羅林の儀式思ひ出でられて、悲しきこと限りなし。漸く夕晩方に至る間に、牛つゆ泥む氣色なし。この参り合へる中にも、邪見なる者共、牛死なで止みなむずるなめりと云ひ嘲る。しかる間、漸く晩方になる程に、臥したる牛立ち走りて、堂に詣でて三匝り廻るに、二度になるに、忽ちに苦ぶ氣色ありて、臥しては起く。かくの如く兩三度して、三匝りを廻り畢つて後に、牛屋に歸り至りて、枕を北にして臥しぬ。四つの足を指し延べて、寢入るが如くして死ぬ。その時に、参り集まれる若干の上中下の道俗男女、音を擧げて泣き合へり。阿彌陀經を讀み、念佛を唱ふることに限りなし。人皆歸りぬれば、牛をば牛屋の上の方に

少し登せて、土葬にしつ。その上に卒都婆を立てて、釘拔を差せり。夏のことなれば、土葬なりといへども、少しも香あるべきに、露その臭き香なし。その後、七日毎に佛教を供養す。七日もしくは明くる年のその日に至るまで、諸の人皆取りぐに佛事を行ふ。この寺の佛は彌勒にまします。しかるにその佛堂共に壊れ、佛も朽ち失せたまひにければ、人昔の關寺の跡など云ひて、礎ばかりを見て、知りたる人も有り、知らぬ人も有るに、横川の源信僧都の、これいかでもとの如くに造り立てむ。止むごとなき佛の跡形もなくておはするが、極めて悲しきなり。就中にかくの如く關の畢に坐する佛なれば、諸の國の人禮まぬ

なし。佛に向ひ奉りて、暫くも首を偈せたる人そら、必ず佛に成るべき縁あり。いかに況や掌を合せて、一念の心を發して禮む人は、必ず當來の彌勒の世に生るべしと、釋迦佛説き置きたまへる事なれば、佛の御法を信ぜむ人、これを疑ふべきにあらず。然ればこれ至要の事なりと思ひたまひて、横川に□□と云ひて、道心有る聖人あり、僧都その人に語り付きて、知識を引かして、佛を造るに、漸く佛形に彫み奉る間に、源信僧都失せたまひぬれば、この聖人故僧都の宣ひ置さし事なれば、愚かに思ふべきにあらずと云ひて、佛師好常を懃るに語りひて造り奉らしめたるなり。堂は僧都の遺言の如く、二階に造り

今昔物語

て、上の階より佛の御顔は見えたまへば、諸の通る人よく禮を奉るに、堂漸く造り奉るに、材木はかくしく出て來ず、佛に箔押し畢らず。この牛佛禮みに來る諸の人、皆物を具して奉る。これを取り集めて、思ひの如く、堂並に大門を造りつ。猶残れる物を以ては、僧房を造りつ。それに獨物餘りたれば、供養を儲けて、大きに法會を行ひつ。その後は、壞るれば、知識を引いて修理を加ふ。凡そこの寺の佛を國々の行き違ふ人禮み奉らぬ事なければ、一度も心を懸けて禮み奉らん人、必ず彌勒の世に生るべき業は造り固めつ。それをこの功德を人に造らしめむが爲に、迦葉佛の牛の身と化して、人を勵めたまふ事

希有に貴きことなりとなむ、語り傳へたるとや。

多武峰の増賀聖人の語

今は昔、多武峰に増賀聖人と云ふ人ありけり。俗姓は橘氏、京の人なり。生れて後久しからずして、父母事の縁あるに依つて、坂東の方に下るに、馬の上に輿に似たる物を構へて、乳母に懐かshめて、此に居ゑて、この兒を將て行く。然れば乳母兒を懷きて、馬の上に居ながら行く間に、眠りにけるに、兒馬より轉び落ちにけり。十餘町を行く程に、乳母眠り覺めて、兒を見るになし。落ちにけりと思ふに、何處に落ちにけむと云ふ事

を知らず。驚き悲んで、父母に告ぐ。父母これを聞いて、音を
 擧げて泣き叫んで云はく、わが子は定めて若干の道行く馬、牛、
 人の爲に踏み殺されぬらむ。生きてあらむこと難し。然れども
 死骸をも見むと云ひて、泣くくうち歸りて求むるに、十餘町
 を歸りて、狭き道の中に、この兒空に仰いで笑うて臥せり。見
 れば泥にも穢れず、水にも濯はれず、疵もなくてあれば、父母
 喜んで懷き取りて、奇異なりと思うて、歸り行きぬ。その夜の
 夢に、泥の上に嚴りたる牀あり、微妙の色の衣を敷きたり。そ
 の上にこの兒あり。形貌端正なる童子の鬢結ひたる四人ありて
 この床の四つの角に立ちて、誦して云はく、佛口所生子、是故

我守護と云ふぞと見て、夢覺めぬ。その後は、この兒只者にあ
 らざりけりと知りて、彌々傳き養ふ間に、兒四歳になる。父母
 に向うて云はく、われ比叡山に登りて、法華經を習ひ、法を學
 せむと云うて、また云ふ事なし。父母これを聞いて、驚き惟ん
 で、幼き程に何ぞかくの如くの事を云ふべき。若しこれ鬼神の
 託きて云はしむる事かと、疑うて恐れける間に、この兒を懐い
 て乳を飲ましむる程に、兒急に成長して、年三十ばかりある僧
 と成つて、手に經を捲いてあり。傍に貴と氣なる聖人の僧まし
 まして、父母に告げて宣はく、汝等驚き惟んで疑ふ事なかれ。
 この兒は宿因あつて聖人となるべき者なりと、告ぐと見て、夢

今言物語

覺めぬ。その後よりぞ、父母これは聖人となるべき者なりけり
 と、心得て喜びける。見年十歳にして、遂に比叡山に登りて、
 天台座主の横川の慈慧大僧正の弟子に成りて、出家して名を増
 賀と云ふ。法華經を受け習ひ、顯密の法文を學するに、心廣く
 智り深くして、既にやむごとなき學生に成りぬれば、師の座主
 もこれをさりがたき者と思つて過ぐる間に、學問の隙には、必ず
 毎日に法華經一部三時の懺悔をぞ斷たざりける。しかる間に、
 道心堅固に發りにければ、現世の名聞利益を永く棄てて、偏へ
 に後世菩提の事をのみ思ひける間に、かくやむごとなき學生な
 る聞え高くなりて、 召し仕はむと爲れども、強ちに辭して、

出で立たずして思はく、われこの山を去りて、多武峰と云ふ所
 に行きて、籠り居て、静かに行ひて、後世を祈らむと思ひて、師
 の座主に暇を請ふに、座主も免さるゝ事なし、傍學生共も強ち
 に制止すれば、思ひ歎きて、心に狂氣を翔ふ。その時に、山の
 内に僧供を引く所あり。皆人下僧を遣りてこれを受くるに、増
 賀自ら黒く穢れたる折櫃を提げ持ちて、かの僧供引く所に行き
 て、これを受く。僧供を引く行事等これを見て云はく、この人
 はやむごとなき學生にて、自ら僧供を受くるは、これ奇異の事
 なりと云ひて、人を以て送らむと爲るに、増賀唯おのれ給はり
 なむと云ひて、受くれば、思ひたまふ様ぞ有らむ、只奉れと云

ひて、受けしめつ。増賀受け得て、房には持ち行かずして、諸の夫共の行く道に、夫共と並び居て、木の枝を折りて箸として、われも食ひ、傍の夫共にも食はすれば、人々これを見て、これはたゞにはあらず、物に狂ふなりけりと轉てがりて、穢がりけり。かくの如く常に翔ひければ、傍の學生共も交はらずして、師の座主にもこの由を申しけり。座主も然の如く成りなむ者をば、今は何がは爲むと、云ひけるを聞きて、増賀思ひの如く叶ひぬと思ひて、山を出でて多武峰に行きて、籠り居て、靜かに法華經を誦し、念佛を唱へて有り。上には魔障強しとて、麓の里に房を造りて、築垣を築き廻はして、それにぞ住みける。

また心を至して、三七日の間、三時に懺法を行ふに、夢に南岳天台の二人の大師來て告げて宣はく、善哉佛子、善根を修せりと見けり。その後は彌々行ひ怠ることなし。しかる間、貴き聖人なりと云ふこと、世に高く聞えて、冷泉院請じて、御持僧とせむと爲るに、召しに隨うて参りては、様々の物狂はしき事共を申して、逃げて去りにけり。かくの如く事に觸れて狂ふ事のみありけれども、それに付けて、貴き覺えは彌々増さりけり。既に年八十に餘りて、身に病なくして、只惱むばかりにて有りけるに、十餘日の前に死期を知りて、弟子を集めて、その事を告げて云はく、われ年來願ふところ、今叶ひなむとす。今この

界まかひを棄すてて、極樂ごくらくに往生わうじやうせむこと、近ちかきにあり、われ尤もつとも喜よろこぶところなりと云いひて、弟子でしを集あつめて講演こうえんを行おこなひて、番論義ばんろんぎを一行いっけいは令しめて、その義理ぎりを談たず。また往生極樂わうじやうごくらくに寄よせて和歌わかを讀よましむ。聖人しやうじん自ら和歌わかを讀よんで云いはく、

瑞齒みづはさす八十やそあまりの老おいの浪なみ、

海月くらげの骨ほねに逢あふぞうれしき。

と。また龍門寺りやうもんじにある春久聖人しゆんきうしやうじんと云いふは、この聖人しやうじんの甥なひなりければ、年來としごころ極めて陸むつじさ間あひた、その聖人しやうじん來きて副そひ居ゐたりければ、聖人しやうじん極めて喜よろこびて、萬よろづの事共ことどもを語かたりてぞありける。しかる間あひた、聖人しやうじん既すでに入滅にやめつの日ひになりて、龍門りやうもんの聖人しやうじん并ならびに弟子等でしちに告つげて

云いはく、われが死しなむこと、今日こんにちなり。但たゞし碁枰ごばん取とりて來きたれと云いひければ、傍かたはらの房ぼうにある碁枰ごばん取とりて來きたぬ。佛居ほとけけす系たてまつ奉たてまつらむずるにやあるらむと思おもふに、われかき起おこせと云いひて、かき起おこされぬ。碁枰ごばんに向むかひて、龍門りやうもんの聖人しやうじんを呼よんで、碁一枰ごいちばんらう打うたむと、弱氣よわげに云いへば、念佛ねんぶつをば唱となへたまはずして、これは物ものに狂くるひたまふにや有あらむと、悲かなしく覺おぼゆれども、怖おそしくやむごとなき聖人しやうじんなれば、云いふ事に隨したがひて、寄よりて枰ばんの上に石いし十じゆばかり互たがひに置おく程ほどに、よしく、打うたじと云いひて、押おし壊こつ。龍門りやうもんの聖人しやうじんこれは何なにによりて碁ごは打うちたまふぞと、恐おそれつく問とへば、早はやう小法師せうぼうしなりし時とき、碁ごを人の打うつを見みしが、只今ただいま、口くちに念佛ねんぶつを唱となへ

今昔物語

ながら、心に思ひ出でられて、碁を打たばやと思ふによりて、打ちつるなりと答ふ。またかき起せと云ひて、かき起されぬ。泥障一懸求めて持ち來れと云へり、すなはち求めて持ち來りぬ。それを結びて、聖人の頸に懸けよと云へば、云ふに隨ひて、頸にうち懸けつ。聖人いと苦し氣なるを念じて、左右の肱をさし延べて、古泥障を纏うてぞ舞ふと云ひて、二三度ばかり奏でて、これ取り去けよと云へば、取り去けつ。龍門の聖人、これは何に奏てたまふぞと、恐れつく問へば、答へて云はく、若かりし時、隣の房に、小法師原の多くありて、笑ひ嗶りしを、覗きて見しかば、一人の小法師泥障を頸に懸けて、胡蝶、胡蝶とぞ人

は云へども、古泥障を纏うてぞ舞ふと、歌ひて舞ひしを好ましと思ひしが、年來は忘れたりつるに、只今思ひ出でられたれば、それ遂げむと思ひて、奏でつるなり。今は思ふ事つゆなしと云ひて、人を皆去けて、室の内に入りて、繩床に居て、口に法華經を誦し、手に金剛合掌の印を結んで、西向に居ながら入滅しにけり。その後、多武峯の山に埋めてけり。然れば實に最後に思ひ出でむ事は、遂ぐべきなり。これを知りて、聖人も碁をも打ち、泥障をも懸けたるなり。人の夢に上品上生に生れぬと告げたりとなむ、語り傳へたるとや。

今昔物語

源信内供横川に於て涅槃經を供養する語

今は昔、比叡山の横川の源信僧都の、内供にてありける時に、横川に諸の道心を發せる聖人達と同心にして、涅槃經を書寫し奉る、各々一卷づゝこれを書く。しかるに西塔の實因僧都の事を聞きて、これ貴き功德なり。結縁の爲に、われも書き奉らむと、云ひて書くを、西塔の人皆聞き繼ぎて書けり。しかるに東塔の四つの谷并びに無動寺まで聞き繼ぎて書さければ、既に十五部になりたまひぬ。劣らじ負けじと競ひ書きける程に、

各々目も曜くばかり、いみじく貴く書き奉りける。既に供養の日になりて、各々横川に持ち集まりたる員、極めて多し。經をば經机共に居ゑ並べ奉りて、僧共の前に皆置きたり。時も吉き程になりぬるに、西塔の實因僧都經共を具し奉りて、同院の人共七八十人ばかり率ゑて渡れり。然れば諸の人思はく、今日の講師は、この僧都の勤めたまふべきなりけりと思ひ合はするに、何にもなくて居固まりて、時も移る程に、實因僧都源信内供に云はく、今は疾くこそ始めたまひてめ、何ぞ遅くなるぞと。内供の云はく、實に久しく罷りなりぬ、疾く禮拜に登らしめたまふべきなりと。僧都の云はく、おのれ今日の講師仕らむこと。

源信内供

更にあるべきことにあらず。御房の勤めたまふべきなりと。内
 供の云はく、おのれ何てか仕らむ、極めて見苦しき事なるべし。
 只御房ぞ疾く登らしめたまふべきなりと。僧都の云はく、然ら
 ば今日の供養は候ふべからぬ事なり。何に仰せらると云ふとも、
 更に爲べき事にあらず。尚仰せられれば、西塔に罷り歸りなむと。
 かくの如く互に譲る間に、日も漸く傾きぬれば、内供かく仰せ
 られむ事を、強ちに申し返さむも、極めて辱く覺ゆ。また人
 人の限りなき道心を發したまへるに、今日を延べむも不便なる
 べし。然ればたゞ形の如く申し上げむと云ひて、立ちて寄るを
 見れば、布衣の太つかなるを着て、下には紙衣を着たり。裳、

袈裟などにも、布の太つかなるを着たり、見るに極めて貴し。
 昔の大迦葉もかく様の姿にやありけむと、推し量らる。かくて
 禮盤に登りて、まづ見廻はして、佛の御方に向ひて、貴く振ひ
 たる音を以て云はく、涅槃經は生々世々にも聞ひ奉ること難し。
 今日けふの結縁けつえんは昔むかしの深ふかき契ちぎりによりてなり。大衆諸共たいしゆしゆともに深ふかくこの
 事を信じて、まづ同時に禮拜らいはいしたまへと云ひて、立ちて禮拜す。
 内供袖を以て顔かほに覆おほひて、音を放ちて泣きたまふ。大衆また一
 時に音を放ちて泣く音、昔の沙羅林さらかりんの人の泣きけむも、かくこ
 そはありけめと、貴く悲しく推し量らる。皆泣き入りて、暫し
 ばかりありてなん、講師泣く泣に噎なみだせながら、形の如く申

今昔物語

し上げたまひける。事畢りて、僧都西塔に歸りて、房にして云はれける様、おのれ講師せましに、佛に物申すことなどは、などか爲ざらむ。但し若干の人を一度に涙を落して泣かしむる事は、有るべきことにもあらず。これは内供の極めたる聖にまします徳に依りて、泣かしたまふなり。今日の結縁の功德に依りて、わが身三惡道に墜ちじと思ふが、極めて貴く悲しきなりと、云ひてぞ泣きたまひしと。小野の座主と云ふ人の聞きて語るを聞き繼ぎてなむ、語り傳へたるとや。

源信僧都の母の尼が往生の語。

今は昔、横川の源信僧都は大和國葛下郡の人なり。幼くして比叡山に登りて、學問して、やむごとなき學生に成りにければ、三條の太后宮の御八講に召されにけり。八講畢りて後、給はりたりける捧物の物共を少し分けて、大和國にある母の許に、かくなむ、後の宮の御八講に参りて、給はりたる。始めたる物なれば、まづ見せ奉るなりとて、遣りたれば、母の返事に云はく、遣せたまへる物共は喜んで給はりぬ。かくやむごとなき學生に成りたまへるは、限りなく喜び申す。但し此様の御八講に参りなどして、行きたまふは、法師になし聞えし本意にはあらず。そこには微妙くおぼすらめども、嫗の心には違ひにたり。嫗の

今昔物語

思ひし事は、女子は數あれども、男子はそこ一人なり。それを元服をも爲させずして、比叡山に上げければ、學問して身の才よくありて、多武峰の聖人の様に貴くて、姫の後世をも救ひたまへと、思ひしなり。それにかく名僧にて華やかに行きたまはむは、本意に違ふことなり。われ年老いぬ、生きたらむ程に、聖人にしておはせむを、心安く見置きて死なばやとこそ思ひしかと、書きたり。僧都これを披き見るまゝに涙を流して、泣くく即ちまた返事を遣りて云はく、源信は更に名僧せむの心なし。たゞ尼君の生きたまへる時、かくの如くやむことなき宮原の御八講などに参りて、聞かせ奉らむと思ふ心深くして、急ぎ

申しつるに、かく仰せられたれば、極めて哀れに悲しくて、喜ばしく思ひ奉る。然れば仰せに随ひて、山籠りを始めて、聖人に成りぬ。今は値はむと仰せられむ時にぞ参るべき。然らざらむ限りは、山を出づべからず。但し母と申せども、極めたる善人にこそおはしましけれと、書きて遣りつ。その返事に云はく、今なむ胸落ち居て、冥途も安く覺ゆる。返すく喜ばしく思ひ聞ゆ。努々、愚かにおはすべからずと。僧都これを見て、この二度の返事を法文の中に巻き置きて、時々取り出だして見つゝぞ泣きける。かく山に籠りて、六年は過ぎぬ。七年と云ふ年の春、母の許に云ひ遣りて云はく、六年は既に山籠りにて過ぎぬ

今言物語

るを、久しく見奉らねば、戀しくやちほしめす。然らば白地に詣てむと。返事に云はく、現に戀しくは思ひ聞ゆれども、見聞えむにやは、罪は滅びむずる。尙山籠りにて、おはせむを聞かむのみぞ、喜ばしかるべき。これより申さざらむ限りは、出でたまふべからずと。僧都これを見て、尼君は凡人にもなき人なりけり。世の人の母はかく云ひてむやと、思ひて過す程に、九年になりぬ。告げさらむ限りは來るべからずと、云ひ遣せたりしかども、恠しく心細く思ひて、母の俄かに戀しく覺えければ、若し尼君の失せたまふべき尅の近くなりたるか、またわが死ぬべきにやあらむと、哀れに覺えて、然らば來べからずと

は宣ひしかども、詣てむと思ひて、出で立ちて行くに、大和國に入りて、道に男文を持ちて値へり。僧都いづこへ行く人ぞと問へば、男云はく、然々の尼君の横川におはする子の御房の許へ遣はす文なりと云へば、しか云ふはわれなりと云ひて、文を取りて、馬に乗りながら、行くく披いて見れば、尼君の手にはあらで、賤しの様に書かれたり。胸塞がりて、何なる事のあるにかと覺えて讀めば、日來何ともなく風の發りたるかと思ひつるに、年の高き氣にやあらむ、この二三日弱くて、力なく覺ゆるなり。申さいらむ限りは出でたまふべからずとは、心強く聞えしかども、限りの尅に成りぬれば、今一度見進らでや止

今言物選

みなむずらむと思ふに限りなく戀しく覺えたまへ(たまふれ?)
 ば、申すなり。疾くくおはしませと、書きたるを見るに、惟
 しく心にかく覺えつるに、かくありければこそありけれ。祖
 子の契りは哀れなる事とは云ひながら、佛の道に強く勧め入れ
 たまふ母なれば、かくは覺えけるなりけりと、思ひ續くるに、
 涙雨の如く落ちて、弟子なる學生共二三人はかり具したりけれ
 ば、それ等にもかゝる事のありければなりけりと云ひて、馬を
 早めて行きければ、日暮方にぞ行き着きたりけり(ける?)急
 ぎ寄り見れば、無下に弱くなりて、憑もし氣もなし。僧都かく
 なむ參て來たると、高やかに云へば、尼君、何て疾くはおはし

つるぞ。今朝曉にこそ人は出だし立てつれと。僧都の云はく、
 かくおはしければにや、近來戀しく覺えたまひ(たまへ?)つれ
 ば、參りつる程に、道にぞ使は値ひたりつると。尼君これを聞
 いて、あな喜ばし、死尅には値ひまふまじきにやとこそ、云ひ
 思ひつるに、かくおはし値ひたる事、契り深く哀れにもありける
 かなと、氣の下に云へば、僧都の云はく、念佛は申したまふや
 と。尼君、心には申さむと思へども、力なきに合せて、勸むる
 人のなきなりと云へば、僧都、貴き事共を云ひ聞かせつゝ、念
 佛を勸むれば、尼君懃ろに道心を發して、念佛を一二百返ばか
 り唱ふる程に、曉方になりて、消え入る様にて失せぬれば、

金言物語

僧都の云はく、われ來ざらましかば、尼君の臨終はかくはなからまし。われ祖子の機縁深くして、來り値ひて、念佛を勸めて、道心を發して、念佛を唱へて失せたまひぬれば、往生は疑ひなし。况やわれを聖の道に勸め入れたまへる志に依りて、かく終りは貴くて失せたまふなり。然れば祖は子の爲、子は祖の爲に、限りなかりける善知識かなと云ひてぞ、僧都涙を流して泣きける。その後、七々日の法事を慥かに修し畢りて、弟子引き具して、横川には歸りたりける。横川の聖人達もこれを聞いて、哀れなりける祖子の契りなりと云ひてぞ、泣く／＼貴びけるとなむ、語り傳へたるとや。

下野公助父敦行に打たれて逃げざる語

今は昔、右近の馬場にして、午番行ひけるに、中少將數馬場に着きたり。その日、下野公助と云ふ舍人、前の馬場にて馬弓射けるに、極めたる上手にて、例はよく射る者、いかにしける事にかありけむ、今日、三つの的を皆射外しつ。公助が父敦行は、政の將監として、馬場の大殿に居たるが、極しく愛する子的を外しつるを見て、色形もなくなりて、脊をも履きあへずして、馬留の方さまに走せ行く。將だちこれを見て、彼はいかに爲るぞと云ひて見遣りて見れば、公助は馬より下りて、調

今昔物語

度解きなど爲るところに、敦行走り懸りて、埒の竹の一節抜けたるを取りて、公助に走り懸りて、打たむと爲るに、公助は若く盛りなり、敦行は八十餘りの者なり、公助逃げむには、追ひ付くべきにもあらず。されば逃げて行きぬべきに、公助突き居て、位したり、その背を十、二十度はかり打つ。これを見る人公助はしれ者かな、然打たれて居るよと喚ひけり。敦行畢りて杖を弃てて、馬場の大殿に歸り行きて、將の前の庭にして、臥し轉びて泣くこと限りなし。將だちも或は泣きぬ。いとをしがりて、手をも下さずして、同じ所に立てたりけり。後に公助を召して、いかで的は外したるぞと打つには逃げずして、然は打

たれ臥したりつるぞと、問はれければ、公助、父の年八十に罷り餘りたれば、痛う腹を立てて、逃げむを追ひ候はむほど、倒れもこそ仕れと、思ひたまひ(たまへ?)て、打たれ臥して候ひつるなりと、答へつれば、將ども泣きにけり。後に脇なる者ありて、公助の的外したるを下して、給はずして、己を同じ脇に立てられたるは、安からぬ事なりと、公助の方の大將にておはしつるに、愁へ申しければ、將どもの許に、然々の訴へあるは、尤も道理なり、いかに行はれたりけむ事ぞと、問はしに遣はされければ、將ども有りし様を委しく申しければ、大將も目を巾ひて、哀れなりける事かなとて、下されぬ尤も理なりとて、

今昔物語

止みにけり。後に公助が云ひけるは、父のわれを打つ、尤も理なり。これわれを悪みて打つにはあらず。それを咎めて、われ悪しと思はば、定めて天の責めを蒙りてむと云ひければ、智りあるやむごとなき僧これを聞きて、關白殿に参りたりけるに、公助はたゞ者には候はざりけり。菩薩の行ひこそ、わが身を棄てて四恩には孝養すれ。此様の者は然は候はぬ事なりと、申されければ、殿も有りがたき者の心なりけりとて、感ぜさせたまひけり。それより覺え増りてぞありける。世に廣くこの事聞えて、讚め貴びけり。公助さればわれも覺えあり、やむごとなき舍人として、子孫も繁昌してありとなむ、語り傳へたるとや。

比叡山實因僧都が強力の語

今は昔、比叡山の西塔に實因僧都といふ人ありけり。小松の僧都とぞいひける。顯密の道について、やむごとなきありける人なり、それにいみえく力のある人にてありける。僧都晝寝したりけるに、若き弟子ども、師の力ある由を聞いて、試みんが爲に、胡桃を取りて持て来て、僧都の足の指十の中に、胡桃八つを夾みたりければ、僧都は虚寝をしたりければ、うち任せて夾まれて後、寢延びを爲る様にうちうむきて、足を夾みければ、八つの胡桃一度にはらくと碎けにけり。しかる間、天皇の僧都内

今昔物語

の御修法行ひける時、御加持に参りたるけるに、伴僧どもは皆通しにけり。通すは通夜する由ならん。僧都は暫く候ひて、夜うち深更るほどに、罷り出てけるに、從僧、童子などはあらむと思ひけるに、履物ばかりを置いて、從僧、童子も見えざりければ、只獨り衛門の陣より歩み出てけるに、月の極めて明かなれば、武徳殿の方様に歩行みけるに、輕らかに装ぞきたる男一人寄り來て、僧都にさし向ひて云はく、何ぞ獨りはおはしますぞ、負はれさせたまへ、己負うて將て奉らむと云ひければ、僧都いとよかりなむと云ひて、心安く負はれにければ、男がき負ひて、西の大宮二條の辻に走り出でて、こゝに下りたまはれと云へば、僧都、わ

れはこゝへや來むと思ひつる、壇所に行かむと思ひつると云ひければ、男さばかり力ある人とも知らず、たゞある僧の衣厚く着たるなめりと思ひて、衣を剝がむと思ひければ、危らかにうち振りて、音を噴らかして、いかでか下りずしては云ふぞ。和御房は命惜しくはなさか、その着たる衣得させよと云ひて、たち歸らむとするに、僧都、いやかくは思はざりつ。わが獨り行くを見て、いとをしがりて、負うて行かんとするなめりとこそ思ひつれ。寒さに、衣をこそ脱ぐまじけれと云ひて、男の腰をひしと夾みたりければ、太刀など以て腰を夾み切らん如く、男堪へがたく覺えければ、極めて悪く思ひ候ひけり、錯ち申さ

（今昔物語）

むと思うたまへる(たまへたる?)が、愚かに候ひけるなり。さらばおはしますべからむ所に將て來らむ(奉らむ?)。腰を少し緩べさせたまへ、目抜け腰切れ候ひぬべしと、術なげなる音を出だして云ひければ、僧都かくこそ云はめとて、腰を緩べて、軽くなりて負はれたりければ、男負ひ上げて、いづちおはしまさむずると問へば、僧都、宴の松原に行きて月見んと思ひつるを、汝がさかしくて、こゝへ負うて將て來れば、まづそこに將て行きて、月見せよと云ひければ、男もとの如くに、宴の松原に將て行きにけり。そこにて、然らば下りさせたまひぬ。罷り候ひなむと云へども、尙免さずして、負はれながら月を詠め、

うそ吹いて、時替はるまで立てり。男侘ぶること限りなければども、僧都、右近の馬場こそ戀しけれ、そこへ將て行けと云へば、男、いかでかさまでは罷り候はむと云ふ(云ひて?)、只に居るを、僧都然らばとて、また腰を少し夾みければ、あな堪へがたき、罷り候はむと、詫び音に云ひければ、また腰を緩べて、軽くなりければ、負ひ上げて、右近の馬場に將て行きにけり。そこにて、また負はれながら无期に歌よみ詠めなどして、そこよりまた喜辻の馬場を下り様に永く遣りてむ。それ將て行けと云へば、辭ふべくもなければ、侘びてまた將て行きぬ。そこよりまた云ふに隨うて、西宮へ將て行きぬ。かくの如くしつゝ、

今昔物語

終夜負はれつゝ行きて、曉方にぞ場所に將て歸り、逃げて去りにけり。男衣を得たれども、辛き目を見たる奴なりかし。この僧都はかく力の極めて強かりけるとなむ、語り傳へるとや。

相撲人私市宗平鰐を投げ上ぐる語

今は昔、駿河國に私市宗平といふ左の相撲人ありけるが、取手ども賢かりければ、出て来て後、左の方にも右の方にも負くる事なかりければ、取手に立ちて、幾ほどをも經ずして、脇に走りにけり。その時に同じ方の相撲にて、參河國に伴勢田世といふ相撲ありけり。勢器量しくて、力極めて強き者なりければ、

取り上げて、取手に立ちて久しくなりたるを、この宗平が脇にてありけるに合はせられたりければ、勢田世打たれにければ、宗平取手に立ちて、勢田世脇に下りてぞありける。然ればこの宗平極めたる相撲にてなむありける。しかる間、この宗平駿河國にて、四月ばかりに狩をしけるに、鹿の背を射られて、内海のありけるを遊ぎ渡りて、向の山ざまに逃げむとするを、宗平遊ぎ行きて、鹿に付く。鹿は三四町ばかり遊ぎ渡りけるに、宗平立ち遊ぎをして、鹿に追ひつきて、鹿の尻足を取つて、肩に引つ懸けて遊ぎ歸るに、奥の方より白浪の立ちて、宗平が方ざまに來りけり。濱に立ちたる射手ども、音を高くあげて、遊ぎ

相撲物語

来る宗平に、その浪は鰐にこそあらめ、噉ひ殺されなんとするはと、云ひて集つて喰るに、その浪宗平が許に来て、浪宗平にうち懸ると見る程に、今は宗平は噉はれたらんと思ふに、浪もとの方へ歸る。また宗平もとの様に鹿を捧げて来るに、陸今一町ばかりになりたるに、暫くばかりありて、またこの浪宗平が許さまへ来る。前の如く宗平にうち懸ると見るほどに、暫くばかりありて、浪また歸る。宗平なほ鹿を捧げて、渚今一二丈ばかりになるほどに、陸の者ども見れば、宗平鹿の尻足二つ、腰骨とを捧げたり。暫くばかりあれば、またこの浪立ちて来る。陸の人集りて、宗平に疾く上りねと喰るに、宗平耳にも聞き入れ

ずして立てり。浪既に近く来るを見れば、鰐目を鏡の様に見なして、大口を開いて、齒は劔の如くなり。近く寄り来て、宗平を噉ふと見るほどに、宗平持ちたる鹿の足を鰐の口に入るまに、鰐の頭の脛に手をさし入れて、佯しになりて、相撲を投ぐる如く、音を叫きて、陸さまに投げ上げたれば、鰐一丈ばかり陸に投げ上げられて、ふためくを、陸に立ちて見る射手ども、箭を射立てければ、鰐の鹿の足を噉へながら、射殺されつ。その後、射手ども集まりて、宗平に、いかにして噉はれざりつるぞと問ひければ、宗平が云はく、鰐は物を噉ふには、そこに噉はずして、持て行きて、必ず己が栖に置きて、その残りある

今世物語

を、また歸りて噉ひに来るなり。然ればそれを知りて、前の度に噉ひに来りつるに、鹿をさし遣りたりつれば、鹿の頭、頤を噉ひ切らせて返しつ。次の度に來りつるを、前足、腹骨を噉はせて遣りつ。次の度に來りつるには、尻足を持ちて噉はせて、投げ上げたりつるなり。これをかく知らざる者は、一度に皆手を放ちて、皆噉はせて、次の度はわれ必ず噉はれなんとす。案内を知らざらん人は、かの様に爲しがたきなり。また力なからん人は、さし遣りて噉はせむほどに、必ず突き倒されなむとぞ云ひける。これを聞く射手ども、希有の事にぞ云ひ合へりける。隣の國までこれを聞いて、讚め噉りけりとなむ、語り傳へたる

とや。

高陽親王人形を造りて、田の中に

に立つる語

今は昔、高陽親王と申す人おはしけり、これは桓武天皇の御子なり。極めたる物の上手の細工になむありける。京極寺と云ふ寺あり、その寺はこの親王の起てたまへる寺なり、その寺の前の河原にある田はこの寺の領なり。しかるに天下旱魃しける年、萬の所の田皆焼け失せぬと噉るに、ましてこの田は賀茂川の水を入れて作る田なれば、その河の水絶えにければ、庭の様にな

今昔物語

りて、苗も皆赤みぬべし。しかるに高陽親王これを構へたまひける様、長四尺ばかりなる童の、左右の手に器を捧げて立てる形を造りて、この田の中に立てて、人その童の持ちたる器に水を入るれば、盛り受けては、すなはち顔に流れ懸る構へを造りたりければ、これを見る人水を汲みて、この持ちたる器に入るれば、盛り受けて、顔に流れ懸りくすれば、これを興じて聞き繼ぎつゝ、京中の入市をなして集まりて、水を器に入れて、見興じ啜ること限りなし。かくの如く爲る間に、その水自然ら溢れて、田に水多く満ちぬ。その時に童を取り隠しつ。また水乾きぬれば、童を取り出だして、田の中に立てつ。然ればま

た前の如く人集まりて、水を入るゝほどに、田に水満ちぬ。かくの如くして、その田つゆ焼けずしてなむ止みにける。これ極じき構へなり。これも御子の極めたる物の上手、風流の至るところなりとぞ、人讚めけるとなむ、語り傳へたとや。

百濟川成飛驒の工を挑める語

今は昔、百濟川成と云ふ繪師ありけり。世に並びなき者にてありける。瀧殿の石もこの川成が立てたるなりけり。同じき御堂の壁の繪もこの川成がかきたるなり。しかる間、川成從者の童を逃しけり。東西を求めけるに、求め得ざりければ、ある高家

今昔物語

の下部を雇ひ、語らひて云はく、己が年來仕ひつる從者の童既に逃げたり、これ尋ねて捕へて得させよと。下部の云はく、安き事にはあれども、童の顔を知りたればこそ搦めめど、顔を知らずしては、いかでか搦めむと。川成現に然る事なりと云ひて、疊紙を取り出でて、童の顔の限りを書いて、下部に渡して、これに似たらむ童を搦むべきなり。東西の市は人集まる所なり。その邊に行きて伺ふべきなりと云へば、下部その顔の形を取りて、すなはち市に行きぬ。人極めて多かりと云へども、これに似たる童なし。暫く居て、若しやと思ふほどに、これに似たる童出て來ぬ。その形を取り出でて比ぶるに、露違ひたる所なし。

これなりけりと、搦めて、川成が許に將て行きぬ。川成これを得て見るに、その童極じく喜びけり。その頃、これを聞く人、極じき事になむ云ひける。しかるにその頃、飛驒の工と云ふ工ありけり。都遷りの時の工なり、世に並びなき者なり。豊樂院はその工の起てたれば、微妙なるべし。しかる間、この工かの川成となむ、各々その技を挑みにける。飛驒の工川成に云はく、わが家に一間四面の堂をなむ起てたる。おはして見たまへ、また壁に繪など書いて得させたまへとなむ思ふと、互に挑みながら、中よくてなむ戯れければ、かく云ふ事なりとて、川成飛驒の工が家に行きぬ。行きて見れば、實にをかしげなる小さき堂

今百物語

あり、四面に戸皆開きたり。飛驒の工かの堂に入りて、その内
 見たまへと云へば、川成椽に上りて、南の戸より入らむとする
 に、その戸はたと閉ぢぬ。驚きて、廻りて西の戸より入る、また
 その戸はたと閉ぢぬ。また南の戸は開きぬ。されば北の戸より
 入るには、その戸は閉ぢて、西の戸は開きぬ。また東の戸より
 入るに、その戸は閉ぢて、北の戸は開きぬ。かくの如く廻るく、
 數度入らむとするに、閉ぢつ、開きつ、入ることを得ず、佗び
 て椽より下りぬ。その時に飛驒の工咲ふこと限りなし。川成妬
 しと思ひて歸りぬ。その後、日來を経て、川成飛驒の工が許に
 云ひ遣る様、我が家に御座ませ、見せ奉るべき物なむあると。

飛驒の工定めてわれを謀らむずるなめりと思ひて、行かぬを、
 度々懃ろに呼べば、工川成が家に行き、かく來れる由を云ひ入
 れたるに、此方に入りたまへと云はしむ。云ふに隨うて、廊の
 ある遣戸を引き開けたれば、内に大きな人の、黒み脹れくさ
 りたる、臥せり、鼻きこと鼻に入る様なり。思ひ懸けぬに、かゝ
 る物を見たれば、音を放ちて、愕いて去り歸る。川成内に居て、
 この音を聞いて、咲ふこと限りなし。飛驒の工怖しと思ひて、
 土に立てるに、川成その遣戸より顔を差し出でて、やゝ己かく
 有りけるは、たゞ來れと云ひければ、恐づく寄りて見れば、
 障紙のあるに、早うその死人の形をかきたるなりけり。堂に謀

今言物語

られたるが妬きによりて、かくしたるなりけり。二人のものの
技、かくなむありける。その頃の物語りには、萬の所にこれを
語りてなむ、皆人譽めけるとなむ、語り傳へたるとや。

三善清行の宰相紀長谷雄と口論
する語

今は昔、延喜の御時に、參議三善清行と云ふ人あり。その時に
紀長谷雄の中納言秀才にてありけるに、清行の宰相と聊かに口
論ありけり。清行の宰相長谷雄を云はく、無才の博士は古より
今に至るまで世になし、但し和主の時に始まるなりと。長谷雄
これを聞くと云へども、更に答ふる事なかりけり。これを聞く

人思はく、さばかりやむごとなき學生なる長谷雄をしか云ひけ
むは、清行の宰相事の外の者にこそありけれとぞ、讚め感じけ
る。况や長谷雄答ふる事なかりければ、理と思ひけるにや。そ
の時にまた惟宗の孝言と云ふ大外記ありけり、やむごとなかり
ける學生なり。かの口論の事を聞いて云ひけるは、龍の昨ひ合
ひは昨ひ臥せられたりと云へども、弊しからず、他の獸は寄り
付かざる事なりとぞ云ひける。これは長谷雄清行の宰相にこそ
かく云はれめ、他の學生は思ひ懸らむやと、云ふ心なるべし。
これを聞く人、げに然る事なりとなむ云ひける。然れば長谷雄實
にやむごとなき博士なれども、なほ清行の宰相には劣りたるに

今昔物語

こそ。その後、長谷雄中納言までなり上りてありけるに、大納言の闕あるによりて、これを望むとて、長谷に詣で、観音に祈り申しける夜の夢に、示して宣はく、汝文章の人たるによりて、他國へ遣はすべきなりと見て、夢覺めぬ。いかなる示現にかあらむと、惟しみ思うて、京に歸りけり。その後、長谷雄の中納言幾程を経ずして死にけり。然れば示現の如く、他國に生れにけりとぞ、人疑ひける。世に紀中納言といふ、これなり。かの清行の宰相は延喜の代の人なれば、前に失せにけり。善宰相と云ふ、これなりとなむ、語り傳へたるとや。

村上天皇菅原文時と詩を作りた

まふ語

今は昔、村上天皇文章を好ませたまひける間、宮の鶯 曉に嘯ると云ふ題を以て、詩を作らせたまひけり。露 濃 緩 語 園 花 底、月 落 高 歌 御 柳 陰 と。天皇菅原文時といふ博士を召してこれを講ぜられけるに、文時また詩を作りけり。西樓月落花間曲、中殿燈殘竹裏聲と。天皇これを聞しめして、われこそこの題は作り抜けたりと思ふに、文時が作れる詩また微妙じと仰せられて、文時を近く召して、御前にて、わが作れる詩を偏頗なく難无 文に衍して、憚らず申すべしと仰せられける。

今昔物語

文時申して云はく、御製微妙に候ふ、下の七字は文時が詩にも増りて候ふと。天皇これを聞きしめて、よも然らじ、これは應の言なり、なほ慥かに申すべしと仰せられて、藏人頭□□を召して仰せたまふ様、文時もしこの詩の勝劣を慥かに申さずば、今より以後、文時が申さん事、われに奏すべからずと、仰せられるを、文時聞いて極めてはしたなく覺えければ、申さく、實には御製と文時が詩と對におはしますと。天皇實に然らば、誓言を立つべしと仰せられるに、文時誓言のえ立てずて、申さく實には、文時が詩は、今一膝居上り候ふと申して、逃げ去りにけり。天皇これを讃め感ぜさせたまふこと限りなし。古の天

皇は文章を好みて、かくなむおはしけるとなむ、語り傳へたる
とや。

延喜の御屏風に伊勢御息所の和

歌を詠める語

今は昔、延喜の天皇御子の宮の御袴着の料に御屏風を爲させた
まひて、その色紙形に書くべき故に、歌讀みどもに、各々和歌
詠みて奉れと仰せたまひければ、皆詠みて奉りけるを、小野道
風といふ手書きを以て書かしたまひければ、春の帖に櫻の花
の榮きたる所に、女車の山路行きたる繪をかきたる所に當りて、

今昔物語

色紙形あり。それを覺しめし落して、歌讀みどもにも給はざりければ、道風書さもて行くに、その歌なれば、天皇これを御覽じて、こはいかじせむと爲る。今日になりては、俄かに誰かこれを詠むべき。をかしき所の歌しもなからむこそ口惜しけれと、仰せられて、暫く覺しめし廻らして、藤原伊衡と云ふ殿上人の少將にてありけるを召しぬ。即ち参りぬ。仰せられて云はく、只今、伊勢御息所の許に行きて、かゝる事なむある、この歌詠みてとて、遣はす。この御使に伊衡を遣はすことは、この人、形、有様より始めて、人柄なむありける。然れば御息所耻かしと思ひぬべきものは、これなむ有ると覺しめして、選びて

遣はすなるべし。さてこの御息所は極めて物の上手にてありける。大和守藤原忠房と云ふ人の娘なり。亭子院の天皇の御時に、参りてありければ、天皇極じく時めき覺しめして、御息所にもなされたるなり。形、心ばせより始め、故ありてをかしく微妙じかりけり。和歌を詠む事は、その時の躬恒、貫之にも劣らざりけり。それに亭子院の法師にならせたまひて、大内山と云ふ所に深く入りて、行はせたまひければ、御息所も世の中冷しく覺えて、家につくくとながめ居たるなりけり。内わたりの事どもも、事に觸れて思ひ出でられて、物哀れに思ひ居たる間に、門の方に前追ふ音す。直衣姿なる人入り来る。誰にかあらむと

今昔物語

思ひて見れば、伊衡の少將の來れるなりけり。思ひ懸けずして、何事にかあらむと思ひて、人を以て問はしむ。伊衡は仰せを奉りて、御息所の家に行きて見れば、五條わたりなる所なり。庭の木立ち極めて木暗くて、前栽極じくをかしく殖えたり。庭は苔砂青み渡りたり。三月ばかりのことなれば、前の櫻隠く榮え、寢殿の南面に、帽額の簾所々破れて、神さびたり。伊衡中門の脇の廊に立ちて、人を以て、内の御使にて、伊衡と申す人なむ参りたると、云はせられたれば、若き侍の男出て来て、此方に入らせたまへと云へば、寢殿の南面に歩み寄りて居たる内に、故びたる女房の音にて、内に入らせたまへと云ふ。簾を搔き上げ

て見れば、母屋の簾は下したり。朽木形の几帳の清氣なる、三間ばかりに副へて立てたり、西東三間ばかり去りて、四尺の屏風の中馴れたる、立てたり。母屋の簾に副へて、高麗端の疊を敷きて、その上に唐錦の茵敷きたり。板敷の燈かれたること、鏡の如し。影残りなく映りて見ゆ。屋の體舊くして、神さびたり。寄りて茵の傍の方に居たれば、内より空蒸きの香冷やかに覆しく、ほのく匂ひ出づ。清氣なる女房の袖口ども透きたり。額つきよき二三人ばかり簾より透きて見ゆ。簾の氣色極じく故ありてをか。耻かしと思へども、簾の許に近く寄りて、内の仰せごとに候ふ。夕ざり若宮の御着袴に屏風して奉るに、色紙

今昔物語

形に書かむ料に、歌讀みどもに歌詠ませて書かせつるを、然々の所を思ひ落して、歌讀みにも給はざりければ、その所の色紙形には、書くべき歌もなし。然ればその歌詠むべき躬恒、貫之召さすれば、各々物に行きにけり、今日にはなりにたり。また異人には云ふべき様なければ、この歌只今詠みて遣はされなやとなむ、仰せごと候ひつると云へば、御息所いみじく驚きて、これは仰せらるべき事にかあらむかねて仰せあらむにてそら、躬恒、貫之が詠みたらんやうにはいかでかあらむ。増して俄かにいとわりなき仰せごとなり。思ひかくべき事にもあらざりけりと云ふ音、髭かに聞ゆ。氣はひ氣高く、愛敬づきて故あり。

伊衡これを聞くに、世にはかゝる人もありけりと聞く。暫くばかりあれば、いつくしき童の汗衫着たる、銚子を取りて、簾の内より居ざり出づ。恠しと思ふ程に、早く居たる簾の下より、繪をかしく書きたる扇に蓋を居えて、差し出でたるなりけり。童のをかしげにて、簾より透さて、居ざり出づるを見るほどに、遅く見つけたるなりけり。また女房よせ来て、蠻繪に蒔きたる硯の蓋に、清氣なる薄様を敷きて、交菓子を入れて、差し出でたり、酒を勸むれば、蓋を取りてあるに、童銚子を持ちて酒を入れる。多しと云へども、抑へてたゞ入れに入る。われ酒飲むと知りたるなりけりと、思ふにをかし。さて飲みつ。

盞を置かむとするに、置かせずして、度々強ふ。四五度ばかり飲み、辛くして盞を置きつ。またうち次ぎ簾の下より盞を差し出づ。辭へども、情なきかはとて、度々飲むほどに、酔ひぬ。女房たち少將を見れば、赤みたる顔つき、眼見、櫻の花に匂ひ合ひて、微妙しく見ゆること限りなし。程も久しくなりぬれば、紫の薄様に歌を書きて結びて、同じ色の薄様に裏みて、女の装束を具して、押し出だしたり。赤色の襲ねの唐衣、地摺りの裳、濃き袴なり、物の色極めて清らに、微妙じ。思ひがけぬ事かなと云ひて、取りて立ちぬ。女房ども少將の出づるを見送りて、めて入ること限りなし。門を出て隠るまで見るに、後手

の歩みたる姿、窈窕かに微妙じ。車の音、前など聞えずなりぬれば、極じく哀れに覺えて、居たりつる齒に移り香媚けば(「原本な」とあり、)取り去け疎し。かくて内には参らずや、参らずや、人を以て見せさせたまふ。殿上口の方に前追ふ音して参れば、ここに参りたりと申せば、疾くくと仰せらる。道風は筆を濕し儲けて、御前に候ふ。また然るべき上達部、殿上人數御前に候ふ。しかる間、伊衡の少將物を被きて、殿上の戸許に被け物をば落し置きて、文を御前に持て來て奉る。天皇これを披きて御覽するに、まづ書き様微妙じくて、道風が書きたるに露劣らず。御息所かく書きたり。

散り散らずさかまほしきを、故郷の

花みて歸る人もあはなん。

天皇これを御覽じて、めでたがらせたまふ。御前に候ふ人々にこれ見よとて、給はせられたれば、をかしき音どもを以て詠ずるに、いとどうたて微妙じく聞ゆること限りなし。度々詠じて後になむ、道風書さける。然れば御息所なほ微妙じき歌讀みなりとなむ、語り傳へたるとや。

敦忠の中納言南殿の櫻を和歌に

詠める語

今は昔、小野宮の太政大臣左大臣にておはしましける時、三月の中旬の頃、公事によりて、内に参りたまひて、陣の座におはしましけるに、上達部二三人ばかり参り會ひて候はれけるに、南殿の御前の櫻の樹の、大きに神さびて艶らぬが、枝も庭まで差し覆ひて、濃く榮えて、庭に隙なく散り積りて、風に吹き立てられつゝ、水の浪などの様に見えけるを、大臣艶らず濃きものかな。例は極じく榮けど、いとかゝる年はなきものを、土御門の中納言の参られよかし。これを見せばやと宣ふほどに、遙かに上達部の前を追ふ音あり。官人を召して、この前は誰が参らるゝぞと、問ひたまひければ、土御門の權中納言の参らせた

今昔物語

まふなりと、申しければ、大臣極じく興ある事かなと、喜びたまふほどに、中納言参りて、座に居るや遅さと、大臣、この花の庭に散りたる様は、いかゞ見たまふとありければ、中納言げ、に謙くぞ候ふと、申したまふに、大臣然らば遅くこそ侍れとありければ、中納言心に思ひたまひける様、この大臣は唯今の和歌に極めたる人に御座す。それにはかくしくもなからむ事を、面なくうち出でたらむは、あらんよりは極じく弊しかるべし。さりとしてやむごとなき人のかく責めたまふ事を、冷じくて止まむも、便なかるべしと思ひて、袖をかき疏ひて、かくなん申し上げける。

主殿の伴のみやつこ心あらば、

この春ばかり朝ぎよめすな。

と。大臣これを聞きたまひて、極じく讚めたまひて、この返し更にえ爲じ、劣りたらむに、長き名なるべし。さりとして増らんことは、有るべき事にもあらずとて、唯舊歌を覺え益さんと思ひたまひて、忠房が唐へ行くとて、詠みたりける歌をなむ、語りたまひける。この權中納言は本院の大臣の在元の北方の腹に生ませたまへる子なり。年は四十ばかりにて、形、有様美麗になむありける。人柄もよかりければ、世の覺えも華やかにてなむ。名をば敦忠とぞ云ひける。□に通ひければ、また本院の中納

今昔物語

言とも云ひけり。和歌をよむこと、人に勝れたりけるに、かゝる歌を詠み出でたれば、極じく世に讃められけるとなむ、語り傳へたるとや。

小野篁が隱岐國に流さるゝ時、

和歌を詠める語

今は昔、小野篁と云ふ人ありけり。事ありて、隱岐國に流されける時、船に乗りて、出て立つとて、京に知りたる人の許に、かく詠みて遣りける。

わたのはら八十島かけて漕ぎ出てぬと、

人には告げよ、海人のつりぶね。

と。明石と云ふ所に行きて、その夜宿て、九月ばかりのことなりければ、明髯に寝られて、眺め居たるに、船の行くが島隠れするを見て、哀れと思ひて、かくなむ詠みける。

ほのくゝとあかしの浦の朝霧に、

島隠れゆく舟をしぞ思ふ。

と云ひてぞ泣きける。これは篁が歸りて語るを聞きて、語り傳へたるとや。

參河守大江定基の許に來れる女の和歌を詠める語

原本の標題には「參河守大江定基送來讀和歌語」とあり、今試みに改む。

今は昔、大江定基の朝臣參河守にてありける時、世の中辛くして、つゆ食物なかりける頃、五月の霖雨しける程に、女の鏡を賣りに定基の朝臣が家に來りければ、取り入れて見るに、五寸ばかりなる、押し覆ひなる張篋の沃懸地に黄に蒔けるを、陸奥紙の積しさに褰みてあり。開けて見れば、鏡の篋の内に、薄様を引き破りて、をかしげなる手を以て、かく書きたり。

今日までと見るに涙のます鏡

なれぬる影を人に語るな。

と。定基の朝臣これを見て、道心を發したる頃にて、極じく泣きて、米十石を車に入れて、鏡をば賣る人に返し取らせて、車を女に副へてぞ遣りける。歌の返しを鏡の篋に入れてぞ遣りたりけれども、その返し歌をば語らず。その車に副へて遣りたりける雑色の、歸りて語りけるは、五條、油小路邊に荒れたる檜皮屋の内になむ、下し置さつるとぞ云ひける。誰が家とは云はぬなるべしとなむ、語り傳へたるとや。

今昔物語

筑前守源道濟の侍の妻最後に和歌を詠みて死ぬる語

今は昔、筑前守源道濟と云ふ人ありけり。和歌を詠むことなむ極めたりける。その人その國に下りてありける間に、侍なりける男、年來棲みける妻を京より具して、守の供に國に下りてありけるが、その國にありける女を語らひけるほどに、その女に心移り畢てにければ、やがてそれを妻にして、この本の妻をば忘れにけり。もとの妻は旅の空にて、爲べき方も覺えざりければ、夫に云ひける様、もとの如くにわれと棲みぬとは、更に

思はず。唯おのづから人の京に上らむに云ひ付けて、われを京へ送れと。夫更に耳にも聞き入れずして、果には女の遣はず消息をだに見ざりけり。本の妻をば居たりける屋に居ゑて、男は今この妻の許に居て、物てもとの妻の有り無しをも知らざりければ、本の妻思ひ歎きてある程に、思ひ懸けず病み付きにけり。唯ありつるそら、うち憑みて遙かに來たる夫は去りて、物食ふらむ事も知らず、此様彼様に構へつゝ過ぎけるに、増して重き病を受けてければ、思ひ遣る方なく、哀れに心細く思ひて臥したるに、京より付きて來たりける女の童只一人なむありける。かく病して術なき由を、男の許に云ひ遣りたりけれども、聞き

入れず。日來を経て、病既に限りになりければ、女哀れに知る人もなき旅の空にて、死なむずる事を歎き悲みて、物も覺えぬ心地に、わななくく、文を書きて、この女の童を以て、男の許に遣りけるを、守の館に女の童の持ち行きたりけるを、男取りてうち見て、返事も遣らずして、然聞さつとばかり云ひて、唯云ふ事もなかりければ、女の童は思ひ縊ひて歸りにけり。しかる間、この男の同僚なりける侍、うち棄て置きたりけるこの妻の文を、何ともなく取りて見ければ、かく書きたり。

訪へかしの、いくよもあらし露の身を、

しばしも言の葉にやかると。

この侍これを見て、情ありける者にて、哀れに思ふこと限りなし。實に奇異しかりける者の心かなと思ひて、女のいと惜しき餘りに、この事守に聞かせてむと思ひて、この文を守に忍びて見せければ、守これを見て男を召して、これはいかなる事ぞと問ひければ、男を隠さずして、事の有様を委しく語りけるを、守聞いて云はく、汝は心疎く人にも非ざりける者の心かなとて、かの許に人を遣りて尋ねければ、女は文を遣りけるまゝに、女の童をも待ち付けずして失せにけり。使歸りて、その由を守に云ひければ、守情ありける人にて、限りなく哀れがりて、まづこの夫の侍を召して、われ汝を年來いと惜しく思ひて仕ひける

今言物語

事こそ、限りなく悔しけれ。汝は人にも非ざりける者の心を、われ近くて見る事なむえあるまじきとて、預け沙汰せさせける事ども、皆止めぬ。行き宿りぬる所々、皆追ひ出だして、館の使を以て、國の間は追ひ出だしてけり。さて死にたる妻の家に人を遣りて、見苦しからぬ様に、直く隠させなどして、僧など籠めて、後の業までなむ縁はせける。夫の侍は、今の妻の許にも寄らしめざりければ、爲べき方もなくて、人の京に上りける船に付きて、一塵の貯へもなくてなむ、京に上りにける。情の心なき者は、心からかくなむありける。守は慈悲ありて、物の心をも知りて、和歌をも詠みける人にて、かく人をも哀みけるとなむ、語り傳へたるとや。

るとなむ、語り傳へたるとや。

平維茂の郎等の殺さるゝ話

今は昔、上總守平兼忠と云ふ者ありけり。これは平貞盛と云ひける兵の弟の繁茂(繁盛?)が子なり。その兼忠上總守にてありける時に、その國にありけるに、餘五將軍維茂と云ふ者は、この兼忠が子にてありけるが、陸奥國に居たりければ、父の兼忠が上總にあるに、久しく見奉らぬに、かく上總守になりて下りたまひたれば、喜びながら参ると、云ひ遣せたりければ、兼忠も喜びて、その儲けを營みて、いつしかと待つに、館

の人既に此に御座したりと云ひ騒げば、その時に風發りて、外には出でずして、簾の内に寄り臥して、入れ立てて仕ふ小侍男を以て、腰を叩かせて臥したる程に、維茂來ぬ。前の廣庇に居て、年來の不審き事など云ふに、維茂が郎等の宗とある者ども四五人ばかり、調度を負うて、前の庭に居並みたり。その第一に居たるものは、字をば太郎介と云ひ、年五十餘りばかりの男の、大きに太りて、鬚長く、爛しく、怖し氣なり、現によき兵かなと見えたり。兼忠これを見て、この腰叩く男に、彼をば見知りたりやと問へば、男知らぬ由を答ふ。兼忠、彼は汝が父先年に殺してし者ぞ、その時は汝がいまだ幼かりしかば、何

かは知らむと云へば、男、父の人に殺されにけりとは、人申せども、誰が殺したるとも知り候はぬに、かく顔を見知り候ひぬることと云ふまゝに、目に涙を浮べて立ちて去ぬ。維茂物など食ひて、日暮れぬれば、息むべき別なる所に行きぬ。太郎介も主の送りして、私の宿に行きぬ。そこにも私の儲けする者どもありければ、様々に食物、菓子、酒、秣藪など持ち運びて喰る、九月晦頃のことなれば、庭暗ければ、ところ／＼に柱松或は「たてあかし」を立てたり。太郎介物食ひ畢て、高枕して寝ぬ。枕上に打出の太刀置きたり、傍に弓、胡籙、鎧、甲あり、庭に郎等ども調度を負うて、所々に立ち廻りつゝ、主を守る。

今昔物語

介が臥したる所には、布の^{ぬの}大幕を二重ばかり引き廻したれば、
 箭など通るべくもなし。庭に立てたる柱松どもの光り、晝の様に
 明し。郎等ども緩べず廻れば、露の怖れあるべくもなし。介
 は遠き道に來り極じて、酒などよく飲みて、うち解けて寝たる
 なりけり。それに守の、汝が祖はかの男の殺しつと、告げける
 を聞きける男、目に涙を浮べて立ちて行きぬれば、只行きぬる
 にこそは有らめと、守思ひけるに、その後、膳所の方に行きて、
 腰刀の端を返すべく、よくく鋭ぎ、懐にひき入れて、暗くな
 る程に、この太郎介が宿したる所に行きて、啼く「よくく」など
 伺ひけるに、食物など持ち運び騒ぎける交れに、この男さる氣

なくて、折敷を取りて、物參る様に見せて、幕引きたる壁の迫
 に入り立ちぬ。心に思はく、祖の敵を討つことは、天道皆許し
 たまふことなり。われ今夜、孝養の爲に思ひ企つるを、心に違
 へず爲し得しめたまへと、祈念して、屈まり居たるを、露知る
 人なし。漸く夜深更て、介□らして臥したるを、男知りて、和
 ら寄りて、喉笛を掻き切りて、かき交れて、踊り出でて行くを
 露知る人なし。夜明けぬれば、介朝遅く起くれば、郎等粥を食
 せむとて、その由を告げに寄りて見れば、血肉にて死にて臥し
 たり。郎等これを見て、此は如何にと云ひて噎れば、郎等ども
 或は箭を番ひ、或は太刀を抜き、走り騒ぐといへども、何の

今昔物語

益かは有らむ。何にまれ、誰が殺したるといふことを知らねば、郎等より外に親しく寄りたる者なければ、郎等の中に知りたる者や有らむと、互に疑ひ思へども、更に云ひがひなし。奇異しき死にしたまひぬる主かな。何とか音をだにしたまはて、かく口惜しく死にたまふべしとは思はてこそ、年來、前後に立ちて叶ひ進りつれ。運の盡きたまひたるとは云ひながら、弊しき死にしたまひぬるかなと、横なはりたる音どもを以て、ありめき合ひて、嗟ること限りなし、しかる間、維茂これを聞きて、極じく驚き騒ぎ、此はわが耻なり。われに憚りをなさむ者は、かくは殺してむや。つゆ憚りの心を置かねばこそ、かくはすれ。

その中に折節のいと便なきことなり。本の栖にて然もありなむ、かく知らぬ國に来て、かく爲られたるは、奇異しく妬きことなり。そもくこの介は一年人殺してし者ぞかし、その殺されし者の子なむ、小待にて守の殿にあるなる。然様の者の殺したるにこそ有りぬれなど云ひて、館に行きぬ。守の前にして維茂云はく、己が供に侍りつる某を、今夜人の殺して候ふなり。かかる旅所に参りて、かく爲られて候へば、維茂が極めたる耻なり。これは異人の爲わざには候はじ。一年の慮外馬咎めに射殺し候ひし男の子の小男こそ、殿に候ふなれ。定めてそれが爲わざにこそ候ふめれ。彼召して問はむとなむ、思ひたまふると。

守これを聞きて云はく。左右なくその男のしたる事ならむ。昨日、その御供に、かの男庭に居たりしを、腰の痛かりし折にて、その小男を以て腰を叩かすとて、彼をば知りたりやと問ひしかば、知らぬ由を答へしに、汝が父は彼に殺されにしぞかしの然様の者をば、顔を見知りたるこそよけれ。彼は汝をば何とも思はじけれども、端なきことなりと云ひしかば、臥し目になりて、和ら立ちしが、その後、今に見えず。立ち去ることもせず夜晝仕はれつる奴の、昨日の夕暮より見えぬ、怪しきことなりまた疑はしきことは、夜前、膳所にて刀をなむ極じく鋭ぎける。それも今朝、男共の疑ひの事ども云ひつるを、聞きつるなり。

そもく召して問はむとあるは、實にその男の爲わざならば、その男を殺したまはむずるか。その由を聞きてなむ、召して奉るべき。兼忠は賤しけれども、賢くおはするその御父なり。それに兼忠を殺したらむ人を、その御眷屬共の此様に殺したらむを、人のかく咎め噴らむをば、われはよしと思はれむずる。祖の敵を罰つをば、天道許したまふことにはあらずや。そのこのやむごとなき兵にておはすればこそ、兼忠を殺したらむ人は、安くは有るまじしと思ひつれ。かく祖の敵を罰ちたる者を、兼忠に付きて責めたまふは、兼忠が服をば爲らるまじきなめりと云ひて、大音を放ちて立ちければ、維茂悪しく云ひてけりと

思ひて、畏まりて和ら立ちぬ。益なしと思ひて、本の陸奥國へ
 歸りにけり。かの太郎介をば、その郎等共ありて皆此彼してけ
 り。その後かの太郎介殺したる男、三日ばかりありて、服を黒
 くして出て來たり。守の前に忍びて、慎むく出て來りければ、
 守より始めて、見と見る同僚、皆泣きけり。その後、この男人
 に心をあかれ、うるさき者に思はれてぞありける程に、幾ばく
 もなくて、病付きて死にければ、守も極じく哀れになむ思ひけ
 る。然れば祖の敵討つことは、極じき兵なりといへども、有り
 がたきことなり。それにこの男啼く只一人して、然ばかりの眷
 屬隙なく守るものを、心の如く討ち得たるは、實に天道の許し

たまふことなめりとぞ、人讚めけるとなむ、語り傳へたるとや。

藤原親孝盗人に質を捕られ、頼

信の言によりて免るゝ語。

今は昔、河内守源頼信朝臣上野守にて、その國にありける時、
 その乳母子にて、兵衛尉藤原親孝と云ふ者ありけり。それも
 極めたる兵にて、頼信と共にその國にありける間、その親孝が
 居たりける家に、盗人を捕へて打ち付けて置きたりけるが、い
 かゞしけむ枷鎖を抜きて、逃げなむとしけるに、逃げ得べき様
 やなかりけむ、この親孝が子の五つ六つばかりなるありける、

今昔物語

男子の形かたちつくしかりけるが、走りはし行きけるを、この盗人ぬすびと質しちに
 取りて、壺屋つぼやのありける内うちに入りて、膝ひざの下したにこの兒ちごをかき臥よ
 せて、刀かたなを抜き、兒ちごの腹はらにさし宛あてて居ゐぬ。その時ときに親孝ちかたかは
 館やかたにありければ、人ひと走りはし行ゆきて、若君わかぎみをば盗人ぬすびと質しちに取り奉たてまつりつ
 と告つげければ、親孝ちかたか驚おどろき騒さわぎて、走りはし來きて見みれば、實げに盗人ぬすびと壺
 屋うちの内うちに、兒ちごの腹はらに刀かたなをさし宛あてて居ゐたり。見みるに目めも暗くれて、
 爲なむ方かたなく覺おぼゆ。唯ただ寄りてや奪うばひてましと思おもへども、大おほきなる
 刀かたなの鑱はめさたるを、げに兒ちごの腹はらにさし宛あてて、近ちかくな寄よりおは
 しましそ。近ちかくだに寄よりおはしまさば、突つき殺ころし奉たてまつらむとす
 と云いへば、げに云いふまゝに突つき殺ころしてば、百もも千ぢに此こ奴やつを切きり刻きざ

みたりとも、何なんの益やくかはあるべきと思おもひて、郎等らうどうどもにも、あ
 なかしこ、近ちかくな寄よりそ、唯ただ遠とほ外とほにて守まもりてあれと云いひて、御おん
 館やかたに参まゐりて申まをさむとて、走はしりて行ゆきぬ。近ちかき程ほどなれば、守かみの居ゐ
 たる所ところに、周章あわて迷まよひたる氣色けしきにて、走はしり出いてたれば、守かみ驚おどろき
 て、こは何事なにごとのあるぞと問とへば、親孝ちかたかが云いはく、只ただ獨ひとり持もちて
 候まうふ子の童わらわを、盗人ぬすびとに質しちに取とられて候まうふなりとて、泣なけば、守かみ
 咲わらひて、理ことわりにはあれども、こゝにて泣なくべき事ことかは。鬼おににも神かみ
 にも取とり合あはむなどこそ思おもふべけれ。童わらわ泣なきに泣なく事は、いと
 嗚呼をこなる事ことにはあらずや。然さばかりの小童こわらわ一人ひとりは突つき殺ころさせよ
 かし。然さ様の心こころありてこそ、兵つはものは立たつれ。身みを思おもひ、妻つま子を

思ひては、俸弊しかりなむ。物恐ぢせずと云ふは、身を思はず、妻子を思はざるを以て云ふなり。さるにてもわれ行き見て見むと云ひて、太刀ばかりを提げて、守親孝が栖へ行きぬ。盗人のある壺屋の口に立ちて見れば、盗人、守のおはしますなりけりと見て、親孝を云ひつる様にはえ息巻かずして、臥し目になりて、刀を彌々さし宛てて、少しも寄り來ば、突き貫きつべき氣色なり。その間、兒泣くこと極じ。守盗人に仰せて云はく、汝はその童を質に取りたるは、わが命を生かむと思ふ故か、また唯童を殺さむと思ふか、慥かにその思ふらむところを申せ、彼奴と。盗人佗し氣なる音を以て云はく、いかでか兒を殺し奉らむとは

思ふたまへむ。只命の惜しく候へば、生かむところ思ひ候へば、もしやとて取り奉りたるなりと。守、をい、然るにと「と」文はその刀を投げよ、頼信がかくばかり仰せ懸けむには、え投げては有らじ。汝に童を突かせてなむ、われを見るまじき。わが心ばへは、おのづから音にも聞くらむ。慥かに投げよ、彼奴と云へば、盗人暫く思ひ見て、辱くいかでか仰せごとをば承らず候はむ、刀投げ候ふと云ひて、遠く投げ遣りつ。兒をばおし起して死したれば、起き走りて逃げて去りぬ。その時に、守少し立ち去りて、郎等を召して、かの男此方に召し出だせと云へば、郎等寄りて、男の衣の頸を取りて、前の庭に引き將出て居

今昔物語

ゑつ。親孝は盗人を斫りても弄てむと思ひたれども、守の云は
 く、此奴いと哀れにこの質を免したり、身の佗しければ、盗み
 をもし、命や生くとて、質をも取るにこそあれ、悪しかるべき
 事にもあらず。それにわが免せと云ふに随ひて免したる、物に
 心得たる奴なり。速かに此奴免してよ、何か要ある、申せと云
 へども、盗人泣きに泣きて、云ふことなし。守、此奴に糧少し
 給へ、また悪事したる奴なれば、末にて人もぞ殺す。厩にある
 草かり馬の中に強からむ馬に、賤の鞍置きて將て來と云ひて、
 取りに遣りつ。また賤の様なる弓、胡籙取りに遣りつ。各々皆
 持て來たれば、盗人に胡籙を負せて、前にて馬に乗せて、十日

ばかりの食ばかりに、干飯を袋に入れて、布袋に褻みて、腰に
 結ひ付けて、こゝよりやがて馳せ散じて去ねと云ひければ、守
 の云ふに随ひて、馳せ散じて逃げて去にけり。盗人も頼信が一
 言に憚りて、質を免してけむ。これを思ふに、この頼信が兵の
 威いとやむごとなし。かの質に取られたりける童は、その後、
 長になりて、金峰山にありて、出家して、遂に阿闍梨になり
 けり、名をば明秀とぞ云ひけるとなむ、語り傳へたるをや。

頼光の郎等ども紫野に見物の語

今は昔、攝津守源頼光朝臣の郎等にてありける、平貞道、

今昔物語

平季武、坂田公時と云ふ三人の兵ありけり。皆見目も綱々しく、手さし、魂太く、思量ありて、愚かなる事なかりけり。然れば東にても度々よき事どもをして、人に恐れられたる兵どもなりければ、攝津守もこれ等をやむごとなき者にして、後前に立ててぞ仕ひける。しかる間、賀茂の祭の歸さの日、この三人の兵云ひ合せて、いかでか今日、物は見るべきと、謀りけるに、馬に乗り次ぎて紫野へ行かむに、極じく見苦しかるべし。歩より顔を塞ぎて行くべきにはあらず。物は極めて見ま欲し、いかゞ爲すべきと歎きけるに、一人が云はく、去來、某大徳が車を借りて、それに乗りて見むと。また一人が云はく、乗

り知らぬ車に乗りて、殿原に値ひ奉りて、引き落して蹴られてや、由なき死にをやせむずらむと。今一人が云はく、下簾を垂れて、女車の様にて見むはいかにと。今二人の者この義よかりなむと云ひて、かく云ふ大徳の車既に借り持て來ぬ。下簾を垂れて、この三人の兵、賤の紺の水干、袴などを着ながら乗りて、履物どもは皆車に取り入れて、三人袖も出ださずして乗りぬれば、心慙き女車に成りぬ。さて紫野さまに遣らせて行くほどに、三人ながら未だ事にも乗らざりける者どもにて、物の蓋に物を入れて振らむ様に、三人振られ合ひて、或は立板に頭を打ち、或は已等どちら頬を打ち合はせて、仰け様に倒れ、仆し様に

今昔物語

仆し轉びて行くに、すべて堪ふべきにあらず。かくの如くして行く程に、三人ながら酔ひぬれば、踏板に物嘔き散らして、鳥帽子をも落してけり。牛の逸物にて早く引きつゝ行けば、横なはりたる音どもにて、痛くな早めそくと云ひ行けば、同じく遣り續けて行く車どもも、後なる歩雑色どもも、これを聞きて怪びて、この女房車のいかなる人の乗りたるにかあらむ、東鳥の鳴き合ひたる様にて、舌だみたるは、心も得ぬ事かな。東人の娘どもの物見るにやあらむと思へども、音、氣はひ大きにて、男音なり、すべて心得ずと思ひける。かくて既に紫野に行き着きて、車かき下して立てば、餘り疾く行きて立てつれば、事

成るを待つほどに、この者ども車に酔ひたる心地どもなれば、極めて心地悪しくなりて、目轉びて、萬の物逆さまに見ゆ。痛く酔ひにければ、三人ながら尻を逆さまにて、寝入りにけり。しかる間に、事成りて物ども渡るを、死にたる様に寝入りたる者どもなれば、露知らで止みぬ。事畢てて、車ども懸け騒ぐ時になむ、目悟めて驚きたりける。心地は悪し、寝入りて、物は見ずなりぬれば、腹立しく妬く思ふこと限りなきに、また歸さの車飛ばし騒がむに、我等は生きてはありなむや。千人の軍の中に馬を走らせて入らむ事は、常に習ひたる事なれば、怖しからず。たゞ貧窮氣なる牛飼童の奴獨りに身を任せて、かく掬ま

れては、何の益のあるべきぞ、この車にてまた歸らば、我等が
 命はありなむや。然ればたゞ暫しかくてあらむ。さて大路を澄
 して、歩より行くべきなりと定めて、人澄みて後、三人ながら
 車より下りぬれば、車は返し遣りつ。その後、皆履物を履きて、
 烏帽子を鼻の下に引き入れて、扇を以て顔を塞ぎてぞ、攝津守
 の一條の家には歸りたりける。季武が後に語りしなり。猛き兵
 と申せども、車の戦は不用に候ふなり。それより後、懲りとも
 懲りて、車のあたりには罷り寄らずと。然れば心猛く思量賢き
 者どもなれども、未だ車に一度も乗らざりける者どもにて、か
 く悲しう酔ひ死にたりける、嗚呼の事なりとなむ、語り傳へた
 るとや。

圓融院の御子日に參れる曾禰

好忠の語

今は昔、圓融院の天皇位去らせたまひて後、御子日の逍遙の爲
 に、船岡と云ふ所に出でさせたまひける。堀川院より出でさせ
 たまひて、二條より西へ大宮まで、大宮より上りにおはしまし
 けるに、物見車所なく立ち重なりたり。上達部殿上人の仕れ
 る装束、書かむにも書き盡くすべくもあらず。院は雲林院の南
 の大門の前にして、御馬に奉りて、紫野におはしまし着きた

今昔物語

れば、船岡の北面に、小松所々に群れ生ひたる中に、遣水を遣り、石を立て、砂を敷きて、唐錦の平張を立て、簾を懸け、板敷を敷き、高欄をぞして、その微妙じきこと限りなし。それにおはしまして、その廻りに同じ錦の幕を引き廻らしたり。御前近く上達部の座あり、その次に殿上人の座あり、殿上人の座の末の方に、幕に副ひて、横ざまに歌讀みの座を敷きたり。既におはしまし着さぬれば、上達部、殿上人仰せに依りて座に着さぬ。歌讀みどもは預て召しありければ、皆参りて候ふ。座に候へと、仰せ下されぬれば、仰せによりて、次第によりて座に着さぬ。その歌讀みどもは大中臣能宣、平兼盛、清原元軸、源

重之、紀時文等なり。この五人は豫て院より廻し文を以て、参るべき由催されたりければ、皆衣冠して参りたるなり。既に座に着き並みぬるに、暫許ありて、この歌讀みの座の末に、烏帽子きたる翁の、丁子染の狩衣、袴の賤し氣なるを着たるが、來て座に着さぬ。人々有て、「有て」の二字いぶかし。こは何者ぞと思ひて、目を付けて見れば、曾禰好忠なりけり。殿上人ども、かれは曾丹が参りたるかと、忍びて問へば、曾丹かく問はれて、氣色立ちて、然に候ふと答ふ。その時に、行事の判官代に、かの曾丹が参りたるに、召したるかど、殿上人ども問ひければ、判官代さる事もなしと答ふれば、然は異人の承はりたるかと、尋ねもて

今言物語

行くに、すべて承はりたりと云ふ人なし。然れば行事の判官代、曾丹が居たる後に寄りて、こはいかに、召しもなきには、参りて居たるぞと問へば、曾丹が云はく、歌讀みども参るべき由催さると承はれば、参りたるぞかし。いかでか参らざるべき。この参りたる主達に劣るべき身かはと。判官代これを聞きて、此奴は早う召しもなきに、押して参りたるなりけりと心得て、いかに召しもなきには参りたるぞ、速かに罷り出でよと、追ひ立つるに、なほ立たずして居たり。その時に、法興院の大臣、閑院の大將など、この事を聞きたまひて、しや衣の頸を取りて引き立てよと、行ひたまへば、若く勇みたる下臈、殿上人ども

數、曾丹が後に寄りて、幕の下より手をさし入れて、曾丹が狩衣の頸を取りて、仰け様に引き倒して、幕の外に引き出だしたるを、一足づつ殿上人ども踏みければ、七八度はかり踏まれにけり。その時に、曾丹が起ち走りて、身の成様も知らず、逃げて走りければ、殿上人の若き隨身ども、小舎人童ども、曾丹が走る後に立ちて、追ひ次ぎて、手を叩いて咲ふ。放れ馬などの様に、追ひ喰ふこと、いと愕だし。さればこれを見るに、多くの人老いたる若きともなく、咲ひ合ひたること限りなし。その時に、曾丹片岳のあるに走り登り立ちて、見返りて、追ひ次ぎて咲ふ者どもに向ひて、音を高くあげて云はく、汝等は何事を咲

今昔物語

ふぞ、われは耻もなき身ぞ。云はむ、聞けよ。太上天皇子日に
 出でさせたまふ、歌讀みどもを召すと聞きて、好忠が参りて座
 に候ふ、搔栗ほとと食ふ、次に追ひ立てらる、次に蹴らる、何
 の耻なると、云ふを聞きて、上中下の人々咲ふ音いと愕だし。
 その後、曾丹逃げて去りにけり。その頃は、人皆この事を語り
 てなむ咲ひける。されば下姓の者はなほ弊しきなり。好忠和歌
 は詠みけれども、心の不覺にて、歌讀みどもを召すと聞きて、召
 しもなさに参りて、かゝる耻を見し、萬の人に咲はれて、末の
 代まで物語に成るなりとなむ、語り傳へたるとや。

木寺の基増物咎めによりて異名
 をつく語

今は昔、一條の攝政殿の住みたまひける桃園は、今の世尊寺な
 り。そこにて攝政季の御讀經行はれける時に、山、三井寺、奈
 良のやむごとなき學生どもを選びて、請せられたりければ、皆
 参りたりけるに、夕座を待つ程に、僧ども居並みて、或は經
 を讀み、或は物語りなどしてなむ、居たりける。寢殿の南面を
 御讀經所にあてたりければ、その御讀經所に居並みである程に、
 南面の山、池などの極しく謔さを見て、山階寺の僧中算が

今昔物語

云はく、あはれ、この殿の木立は異所には似ずかしと、云ひけるを、傍に木寺の基増と云ふ僧居て、これを聞くまゝに、奈良の法師こそなほ疎き者はあれ。物いひは賤しき者かな。木立こそ云へ、木立と云ふらむよな。後めたなきの言やと云ひて、爪をはたくとす。中算かく云はれて、悪しく申してけり、さらば御前をば、小寺の小僧とこそ申すべかりければ、云ひければ、有りと有る僧ども、皆これを聞きて、音を放ちて、愕だしく咲ひけり。その時に、攝政殿この咲ふ音を聞きたまひて、何事を咲ふぞと問はせたまひければ、僧ども有りたまひに申しければ、殿、これは中算がかく云はむとて、基増が前にて云ひ出だしたる事を、い

かてか心を得ずして、基増が案に落ちて、かく云はれたるこそ弊しければ、仰せたまひければ、僧ども彌々咲ひて、それより後、小寺の小僧と云ふ異名は付きたるなりけり。はしたなく物咎めして、異名付きたるとなむ、基増悔しがりける。この基増は□□の僧なり、木寺に住みけるによりて、木寺の基増とは云ふなり。中算はやむごとなき學生なりけるに、またかく物云ひなむ可咲しかりけるとなむ、語り傳へたるとや。

禪林寺の上座助泥破子闕きたる語

今は昔、禪林寺の僧正と申す人おはしけり、名をば深禪とぞ申

今昔物語

しける。これは九條殿の御子なり、極めてやむごとなかりける
 行人なり。その弟子に徳大寺の賢尋僧都と云ふ人ありけり。そ
 の人いまだ若くして、東寺の入寺になりて、拜堂しけるに、大
 破子の多くいりければ、師の僧正破子三十荷ばかり調へて遣ら
 むと思ひたまひけるに、禪林寺の上座にて、助泥と云ふ僧あり
 けり。僧正その助泥を召して、然々の料に破子三十荷なむいる
 べきを、人々に云ひて催せと宣ひければ、助泥十五人を書き立
 てて、各々一荷を宛て催さしむ。僧正、今十五荷の破子は誰に
 宛てむと爲るぞと、宣ひければ、助泥が申さく、助泥が候ふこ
 そは破子候ふよ。皆も仕るべけれども、催せと候へば、半を

催して、今半をば助泥が仕らむするなりと。僧正これを聞
 きて、いと喜ばしき事なり。さらば疾く調へて奉れと、宣ひつ。
 助泥、さらば然ばかりの事せぬ貧究やはある、あないとをしと
 云ひて、立ちて去りぬ。その日になりて、人々に催したる十五
 荷の破子、皆持て来ぬ、助泥が破子いまだ見えす。僧正怪しく
 助泥が破子の遅きかなと、思ひたまひけるほどに、助泥袴の袂
 りを上げて、扇を開き仕ひて、したり顔にて出て来たり。僧正
 これを見たまひて破子の主こゝに來にたり極じくしたり顔にて
 も來るかなと宣ひけるに、助泥御所に参りて、頸を持ち立て
 て候ふ。僧正いかにぞと問ひたまへば、助泥、その事に候ふ、

今昔物語

破子五つを借り得候はぬなりと、したり顔に申す。僧正さてと宣へば、音を少し短くなして、今五つは入物の候はぬなりと申す。僧正さて今五つはと問ひたまへば、助泥音を極しく竊かにわななくかして、それはかたきへて忘れ候ひにけりと申せば、僧正、物に狂ふ奴かな。催さましかば、四五十荷も出て來なまし、此奴はいかに思ひて、かゝる事をば闕きつるぞと、問はむとて、召せと、嗚りたまひけれども、跡を暗くして逃げて去にけり。この助泥は物可咲しう云ふ者にてなむありける。これによりて助泥が破子と云ふことは云ふなりなり。これ嗚呼の事となむ、語り傳へたることや。

中納言紀長谷雄の家に狗の顯はるゝ語

今は昔、中納言紀長谷雄と云ふ博士ありけり。才賢く悟り廣くして、世に並びなく、やむごとなき者にてはありけれども、陰陽の方をなむ、いかにも知らざりけり。しかる間、狗の常に出て來て、築垣を越えつゝ尿をなしければ、これを怪しと思ひて、□□と云ふ陰陽師に、この事の吉凶を問ひたりければ、某の月の某の日、家の内に鬼現する事あらむとす、但し人を犯し、祟りをなすべきものにはあらずと、占ひたりければ、その日物忌を

今昔物語

すべきななりと云ひて止みぬ。しかる間、その物忌の日になり、
 てその事忘れて、物忌をもせざりけり。さて學生どもを集めて、
 作文して居たりけるに、文頌する盛りに、傍に物ども取り置き
 たりける塗籠のありける内の方に、極めて怖し氣なる者の音
 にて吠えければ、居並みたる學生ども、この音を聞きて、これ
 は何の音ぞ、何の音ぞと云ひつゝ、恐ぢ迷ひけるほどに、その
 塗籠の戸を少し引き開けたりけるより、動き出づる者あり。見
 れば、長二尺ばかりある者の、身は白くて、頬は黒し、角の一
 つ生えて黒し、足四つありて白し。これを見て、皆人恐ぢ迷ふ
 こと限りなし。しかるにその中に一人の人、思量あり、心強か

りける者にて、立ち走るまゝに、この鬼の頭の方をはたと蹴た
 りければ、頭の方の黒き物を蹴抜さつ。その時に見れば、白き
 狗の行と哭きて立てり。早う狗の楪を頭にさし入れたりけるを、
 楪を蹴抜きたるまゝに見れば、狗の、夜、塗籠に入りける
 が、楪に頭をさし入れてけるを、え引き出でて、なく音の怪し
 きなりけり。それが走り出てたるを、物恐ぢを爲す、量りあり
 ける者の、狗のしかありけるなりけりと見て、蹴顯はしたるな
 りけり。かく見て後になむ、人ども肝落ち居、心直りける。そ
 の後は集りて吠ひけり。されば實の鬼にあらぬども、現に人の
 目に鬼と見ゆれば、鬼とは占ひけるなり。それに人を犯し、祟

今言物語